
それは暁色の.....

宵城空歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは暁色の……

【Nコード】

N9843M

【作者名】

宵城空歌

【あらすじ】

雨欺……それは異能の力を持ち強大な権力を持つ一族。これは、そんな雨欺の一族の中でも屈指といわれる雨欺暁留あまぎあきととそんな彼に溺愛（？）される深桜仄みおうほのあを中心とした物語。作者も何したいかよく分かりませんがお付き合いいただけると嬉しいです。

オープニングという名のちょっとした過去話（前書き）

この物語は恋愛要素……というか溺愛要素および（もしかしたら）少々残酷な描写が含まれるかもしれません。警告タグはとりあえず張り付けませんが残酷な描写はそのひとつ前の小説のあとがき及びその小説の前書き、タイトルに警告します。また、残酷な描写を読まれない方のためにその一つ後の小説の前書きに何が起こったのかを少し書かせていただこうとおもいます。よろしく願います>

（――）<

オープニングという名のちょっとした過去話

「どうして君を助けなくちゃいけないの？僕は君に何もされてないのに。」

そう言つて彼は私を裏切つた。呆然と立ち尽くし、さしていた傘が地面に落ちても気にならなかつた。

「どうしても助けてほしいというのなら今から僕についておいで。」
そういつた彼は裏切り者でもあり——いや、勝手に私が信用してたただだから裏切り者つていうのはひどいかな？——また救世主でもあつた。私を助けてくれる唯一のもの。私が頼れる唯一の人。

「どうする？」

私は彼の手を取つた。そして彼の言うことを何でも聞いた。その代わりに彼は私の願いをできる限り聞いてくれた。彼の家は私と彼だけの楽園になつた。箱庭になつた。そして数年後……私は彼から逃げた。甘い甘い楽園、優しい優しい箱庭……それが怖くなってきて逃げた。そしてまた数年後……私は——

オープニングという名のちょっとした過去話（後書き）

すみません、アリスが上手くいっていないというのに新しい連載です。これは一応まだ書きためてあるので今のところは更新頻度は高くないです。途中からは亀より遅いものとなります多分。それでもお付き合いいただければうれしいです。

逃亡生活の終わりという名の転校

『はい、到着です。』

ついに来てしまった……あの人のいる場所へ……

「ありがとうございます。」

スクールバスの運転手さんにお礼を言っ、て、私立欧里学園の地を踏む。

「えーと……三年一組ね。」

中等部の校舎の三階まで上がる。先生が廊下に立っていた。

「おお、深桜だな、入れ。」

まだ年の若い女の先生。なかなかの美人。確か名前は織原まひろ。年は二十七。担当教科は現代文。

「さっき言った転校生を紹介する。」

私は名前を黒板に書く。深桜仄亜。

「これでミオウホノアと読みます。半端な時に編入してきましたが、どうぞよろしくお願いします。」

今は中三の三学期。どう考えてもおかしい。

「質問に答える形式でいいか？」

「はい。」

「あー……じゃあ無難に誕生日と血液型。」

手は上がらないが質問された。

「誕生日は十月二十一日。さそり座。血液型はA型です。」

少しざわめくクラス内。

「趣味は？」

「読書です。」

「好きなもの。」

「そうですね。好きな食べ物は洋食です。嫌いなものはネギ類のもの。好きな科目は国語、英語。語学はなんでも好きです。嫌いな教科は数学。これは嫌いというか苦手です。あーあと、幼少時はブラ

コンでした。多分。」

笑いに包まれるクラス内。そりゃそうか。

「ちなみに兄は深桜桐生。この高一生ですね。」

「だからここに転校してきたの？」

「それは違います。私は別の人に会いに来ましたから。」

そう。彼に会いに来た。あの、残酷で狂ってて……それでいて恐ろしく美しい彼に。

「え、誰？」

「おい！お前聞きすぎ。」

さつきからいろいろ聞いてきた女子を、クラス会長の男子がたしなめる。

「いえ。かまいませんよ。ここじゃ有名なはずですから。」

なんせ学園長の親戚だし。

「雨欺暁留。」

アマギアキト。名前を紡いだ時、心が揺れた気がした。教室内がざわめく。数分後、そのざわめきを止めるかのようにドアが勢い良く開かれる。

逃亡生活の終わりという名の転校（後書き）

次回、微妙な残酷描写を含みます。といってもそこまでのものではありませんが……血も出てきませんし。一応の警告。

仲がいい二人の再会という名の壊れた二人の再開（軽度の残酷描写）（前書き）

微妙な残酷描写を含みます。大したものではありませんが念のため。
ちよつと長め？

仲がいい二人の再会という名の壊れた二人の再開（軽度の残酷描写）

「仄亞……？」

「……雨欺先輩。まだ終礼中で……っ！」

入ってきた人間に勢いよく抱きつかれる。雨欺暁留に。

「桐生の馬鹿……もつと早く言えつての……」

「お前に言ったら即座に会いに行くだろ？」

「だって何年も待った。近くにいると分かればもう我慢も自制もきくわけがない。」

「お兄ちゃん。」

遅れて入ってきたのは私の兄、深桜桐生だった。

「おかえり。仄亞。ここに直接来なくても家に一度帰ればよかったのに。そんなに暁留に会いたかったのか？」

からかうように言ってくるお兄ちゃん。でもそれはあながち間違いない。

「うーん……まあそんなとかな。」

「ふうん……お前ら本当に仲いいなあ。」

仲がいい？とんでもない。私と彼の間にある感情は壊れたものだ。

「はあ……仄亞も連絡ぐらいしてくれればよかったのに。そうしてくればジェット機だろうがリムジンだろうが寄越したのに。」

そんなところで雨欺の権限を出さないでほしい。金持ちめ。

「あのですね。まだ終礼中なんですよ。先輩。」

微笑んでだからとつと帰れオーラを出す。

「それ、喧嘩売ってる？」

「何のことでしょう。」

「敬語と呼び方。喧嘩売ってるの？仄亞？」

「いえ、公私混同はよくないことはもう学びましたから。」

「売られた喧嘩は買う主義なの、仄亞も知ってるよね？」

ダメだこいつ、人の話を聞いちゃいねえ。

「もう一度チャンスをあげるよ。僕のこと呼んで？」

「雨欺先輩。」

これみよがしに溜息をつかれた。

「はあ……馬鹿だねえ仄亞は……昔みたいに呼んでくれれば少しは優しくしてあげたのにね……？」

私がつけているペンダント、それをひねって輪を作り、その輪を外側に引つ張る。無論私の首は締まる。

「ま、少しは苦しそうにしな？愉しんであげるから。」

「うう……くっ……」

声を出そうにも出せない。銀の鎖が首を貫通するかも。

「そうそう。可愛いよ。」

「うぐっぐ……」

笑顔でその苦しげな私の姿を見ているあたり、彼の性格は全く変わっていないご様子で。というかなんかもっとひどくなってる気もする。

「さ、二度目のチャンス。名前、呼んで？」

「げほっ……ごほっ……公私混同はよくないってさっきからっあ。」

「面白い子だなあほんと。虐められたいの？」

くすくす笑いながらまた鎖で首を締め付ける。ダメだ。ここではそんな姿を晒しちゃいけない。

「うぐっぐ……うあ。」

「それとも僕を愉しませたいのかな？ま、どっちにしろ同じことだよね。」

昔は外ではまだまともな人だったのに。ほら、お兄ちゃんも先生もみんなも啞然としてるじゃない。

「んん……はあっ……」

「三度目。」

「アキお兄ちゃん？」

「ま、それでもいいけどねえ……変な眼で見られると思わない？確実に。」

それでもいいならまた締め付けないでほしいんだけど。

「はあっ……うっあ……」

「ああもう……ほんとに狂いそう。声、出そうとしなけりやもう少し楽になれるのにねえ……」

苦しそうにしろと言われたからわざと声を出そうともがいているなんて分かる人、何人いるのだろう。

「さ、四度目だよ。」

「暁留。」

「よくできました。あーあーもう……跡になっちゃってるじゃん。

鎖。」

そう言いながらその鎖の跡を舐めていく。ここ、どこだか分かってるの？

仲がよい二人の再会という名の壊れた二人の再開（軽度の残酷描写）（後書き）

深桜さんの家は四人家族です。心配性、苦勞性の兄、桐生と策士、人間不信（一部を除く）の妹、仄亞。母最強伝説があつたりなかつたりする咲良、仕事人間であまり家にいない婿養子の数人^{かずと}で構成されています。ちなみに暁留は一人息子で、彼の両親は彼が八歳のときに死亡しています。

婚約という名の契約と兄の苦悩（前書き）

仄亞はなんだかんだ言っても暁留を愛しています。溺愛です。愛に溺れてるんです。

婚約という名の契約と兄の苦悩

「おい暁留。」

「何さ桐生。」

「今のはなんだ？」

「愛情表現です、とまでは言わないけどさ、どう考えても自業自得でしょ。これは。」

「……違うもん。ちよつと意趣返ししたかったただけだもん。」

ぼそりと呟いた声はどうやら届いてしまったようだ。その証拠に笑ってる。そっぴや地獄耳だったつけ。

「意趣返しね……それ、もう十分すぎるくらい出来てると思うんだけどな。どーせ昔の仕打ちを少し復讐しようと思ったんでしょ。したけりゃすれば？」

「ば、ばれてる……」

「していいの？」

「それで仄亞がそばにいてくれるならまあ……逃げる以外なら別に。」

「暁留がそんなこと言うなんて……これ、夢？」

「僕もまさか仄亞が帰ってくるなんて思ってたから夢みたいだ。」

そう言って私の頬をつねる。自分にやろつよ意味ないじゃん。

「いひゃい！」

「うん、どうやら夢じゃないらしいよ。」

「うう……」

「ていうかさ、楽園だか箱庭だかは仄亞も愉しんでたじゃん。」

「その前の出来事を指してるの！」

「あーあれ？もう良くない？時効だって。それにそのおかげで双方愉しめたんだからいいじゃん。」

「あとこのペンダントのことも！」

私の胸元には羽根をあしらった銀色のペンダントが光っている。その羽根には小さなルビーが埋め込まれていてなかなかいい趣味をしたものなんだけど……

「ああ……でもここ、向こうと同じく雨欺の支配下に置かれてるからそれぐらいのアクセサリーなら許してくれるよ？」

「そうじゃない！」

これ、外れないのだ。なんだか知らないけど。まあ水に入れても錆びないのだけれどだからいいって問題じゃない。

「外さないよ。言っただろう？どうしても外してほしいなら僕以上に信頼できる人見つけろって。その人なら外せるさ。」

そして、これ、暁留は外せるのだ。ってまあつけた本人だから当たり前だけでも。で、暁留曰く自分以上私が信頼できる人なら外せるようになってるらしい。しかもこのペンダントにはある意味が含まれている。

「いいじゃない。僕の婚約者なんだしさ……もうそれうちじゃ決定事項だし咲良さんも普通に認めてくれるだろうし。ていうか仄亞じやなきや僕結婚しないし。」

教室中がめちゃくちゃざわめいた。ああもう……こんなところで言わないでよ。

「ね、仄亞。僕の《片翼》になつて？」

めちゃくちゃ甘い声で言われた。あ、だめかも。溶けそう。

「うう……はい。なんで流されちゃうのよお。」

婚約という名の契約と兄の苦悩（後書き）

片翼……婚約者のこと。雨欺一族は基本不老不死に近い体ですが片翼が死ねば一日後に死にます。（暁留の父親は片翼を交通事故で亡くしたので一日後に息子の目の前で死んだんです。実は。）逆に、片翼も結婚と同時に雨欺の血を飲まれ、雨欺（人外）になるので不老不死に近くなります。こちら相手も死ねば一日で死にます。片翼では鳥は飛べない。そういう意味での片翼です。ちなみにペンダントは片翼の証です。

愛情表現という名の迷惑行為（前書き）

短め？

愛情表現という名の迷惑行為

「じゃあこのペンダントも問題ないよね？」

「それは問題だらけなの。こんなの学園全体に公表してるようなものじゃない。」

だつてこれ、晧留とお揃いなんだよ？

「いいじゃん。虫よけ虫よけ。」

そう言つて唇にキスを落とすやがった。

「んう。」

しかも長い。何分経つたのだろう。こつちも疲れてきたころようやく解放される。

「はあ……ヤバいな、久々すぎて自制がきくかな……」

「頼むからきかせて。ここどこだと思つてるの？」

「学校だねえ。」

「分かつてるのなら少しは自制してよ。明日からどうしろつての。」

「ああ……そうだね。昔みたいなのもいいけどでももう手に入ったしね。よし。えーと……ここに居る人たち、仄亞を苛めたら僕が精神的に殺されるか、肉体的に殺されるか、社会的に殺されるかどれか選ばせてあげるね？ 仄亞の敵は雨欺の敵だから。覚えておくように。」

冷酷にそれでいてどこまでも美しく甘く微笑みながら言葉を紡ぐ晧留。ああ、雨欺だ。どこまでも雨欺の微笑みだ。そうそれは絶対の微笑み。異論は認めない微笑み。

「溶けちゃいそう……」

それは私にとつては身も心も溶かされてしまいそうになる、究極の微笑み。腰が抜けそうになる。

「おっと。危ないな。」

倒れそうになつたのを助けてもらつ。危ない危ない。このままだと普通に床とご対面するところだつた。

「ん、ありがとう。」

「何がそんなに良かったのか気になるねえ。」

「……別に。」

言いたくない。というか恥ずかしくて言えない。

「ま、それはおいおい聞くとして。立てる？」

「うん。なんとか。」

「そう。」

ゆっくり私を支えていた手が離される。妙なところで優しいんだよなあ。

愛情表現という名の迷惑行為（後書き）

仄亞さんは人前ではドライです。基本的には。二人きりになったら……甘くなります。暁留は嫉妬深いです。独占欲半端ないです。ていうか雨欺の男はみんなそんな感じですよ。ちなみに雨欺の女は尽くして尽くして尽くします。尽くし切ります。もうあんたどこのメイドさんですか？ってくらい尽くします。そのお話も小話で書こうかな。

深桜のご令嬢という名の雨欺のご令嬢（前書き）

令嬢であることには変わりないですよー。狙われる率が高いのは雨欺のご令嬢です。いろんなところから恨みかってます彼ら。好き勝手しまくってるせいだと思われます。

深桜のご令嬢という名の雨欺のご令嬢

「ところで仄亞、一つ聞きたいんだけど。」

「ん？」

「君、ここまで何できた？」

「ここまで？そりゃあ……」

「飛行機だけど？」

岐阜からだし。

「どんな名前で飛行機使った？」

「そりゃあ深桜仄亞だけど？」

当たり前でしょ。

「はああ……危機感がなさすぎるよ……」

危機感？

「あのね……一応君は元深桜のご令嬢で現雨欺のご令嬢なんだよ？」

「うん、とりあえずまだ籍はいれてないからね？」

「大丈夫、後数年だから。」

何が大丈夫なんだか。

「で、まあ君は現在進行形で狙われちゃってるわけだね。」

「そんな今さら……暁留に狙われてるのなんていつものことじゃん。」

「いや、違うつて。そういう意味じゃなくて……」

「ああ、他の男の人？そんな悪趣味な人ここにはいないって。」

多分。

「それって前の学校にはいたってこと？」

「しまった。失言だ……どーしよう。とりあえず誤魔化すか。」

「あ、いや、あの「いや、まあそれはどうでもいいんだけどね。」

「は？」

今なんて言ったこいつ。

「あ、ごめん。今のは言葉の綾で……って仄亞！危ない！」

速攻で暁留のそばを離れる、とほぼ同時に銃声が鳴った。え？そう思った時には床に倒れていた。

「だから言っただろ？危ないんだって。危機感持つてよ。」

私は無事だった。暁留が庇ってくれたおかげで。

「ごめん！大丈夫？痛くない？」

綺麗に肩のあたりをかすったようで、制服が破け血が流れている。

「ん？これくらい平気だけど。ていうか仄亞は大丈夫？」

「私は全然平気だけど……」

「なら僕も平気だよ。」

あつさりと言つてのけた。

「ま、とりあえずここで抱き合つてれば安全でしょ。狙いは分かったしね。許可が下りるのを待つてればいい。」

「許可？」

「そ。ここさー学園長の支配する場所だから好き勝手力使えないんだよねえ。」

そつか……だから傷も治せなかったのか。

「ま、やろつとすればできるけどめんどくさいし。雪白に許可取るほうが楽。」

雪白って言つのは学園長補佐をやっている雨欺の親族。年は十六歳で髪が白い。かわいらしい女の子だ。

「じゃあ電話とかしたほうがいいんじゃないの？」

「それだと向こうにばれるじゃん？だから待つてようかと。そしてら雪白がおかしいことに気づくはずだしね。」

「いつまでも抱き合つてるのヤダ。」

「はいはい。ツンデレはいいから。」

いや、本気でやなんだけど？

「んー……にしてももう一つ変なのがいるな。ああ、そういうことか。ふうん……一氣にここの面白くなってきたじゃん。」

「意味不明なこと言わないでよ。」

まあ、いつものことだけどさ。雨欺の人間の頭の回転が速すぎて常

人じゃ追いつけないことなんて。

深桜のご令嬢という名の雨欺のご令嬢（後書き）

まず最初に…… お気に入り登録ありがとうございます！喜びを隠しきれずベツトでニヤニヤしております。はたから見ればアヤシイ人です。友人に言えば即座に普段からアブナイから大丈夫とか言われそうですが！そんなアブナイ人ですがこれからもよろしくやってください。

さて、雪白さんについてはまた次回（かその次）に説明しますが、彼女は雨欺の女です。ええ、尽くす女でございます。でもっていわくつきです。とあるものは付いていないというのにいわくは付いております。とあるものが何かはまた次回かその次で……。

異能という名の暴力（前書き）

サブタイトルが少しあれですが特に残酷描写は含まれません。

異能という名の暴力

「暁留さん？いらつしやいますか？」

「あ、雪白。早いね。」

ドアの向こうから声がする。

「不審者により校内状況異常とみなします。よって許可を下します。好きに暴れて結構ですよ。」

「ん、了解。じゃ、楽しい宴を始めようか。」

そう言つて目を閉じる。次に目を開けた時には暁留の瞳は本来の色……暁のような血のような赤になっていた。

『幻想を現実……』

その口から出るのは異国の言葉。英語でも、フランス語でも、ドイツ語でもない。この世界とは違う、異世界の言葉。そして、狙撃主の周りは赤く染まる。暁留の領域へと化す。

『動くはずの手が動かなくなる。』

狙撃主の両手は動かなくなった。

『出るはずの声が出なくなる。』

声を失った。

『こちらへ来る気がないのに来てしまふ。』

狙撃主がこちらに現れた。口をパクパクさせている。餌を与えられた金魚のように。暁留は顔に雨欺の頬笑みをたたえ、最後の言葉を紡がんと口を開く。

『幻想が現実と化した時、ヒトは恐怖を覚える。君もまたしかり。』

さあ、何処よりも美しく狂わしい幻想の庭園で朽ち果てろ。』

狙撃主は倒れた。

「ん、まあこんなもんでいいかな？雪白、入ってきていいよ。」

どこまでも白い少女が入ってくる。白いスーツに白い髪、灰色の目。

「さすがですね。暁留さん。」

「まあね。この人、縛って家に入れといて。」

狙撃主は死んでない、だって幻想で死んだわけであって現実で死んだわけじゃないからね。ただ気絶しただけ。

「はい、そのように。ところで、あと二つ不穏な気配を感じるのですが……」

え？二つ？さつき暁留は一つって言ってなかった？

「そうだねえ。ま、でも問題ないよ。」

「そうなんですか？」

「とつととUSBを渡せこのマッドサイエンティスト！」

「うわ！ちよつとすみません、かくまっていただけです？」

入ってきたのはどこまでも白い青年。白衣に白い髪、灰色の目。

「あ、雪兄久しぶり。」

「あれ？暁留？なんでお前こんなとこいんの？」

彼は多分暁留の従兄の雨欺白雪さん。年は二十四歳で、つい最近までアメリカにいてたはず。

「まあちよつといろいろあつてさ……雪兄こそどうしたの？」

「んー向こうで思わぬ副産物ができてさあそれを某組織が狙ってる。てかなんでここ能力使えないわけ？」

一体どんな副産物ですかそれは。

「学園長の土地だからね。雪白が学園長か……まあそんな感じの人に許可取ったら使えるよ？」

「はあああ……じゃ、雪白、悪いけど許可ちょうだい？」

そついつて雪白に微笑みかける白雪さん。でも雪白は白雪さんに銃を向けていた。

「あなた、誰です？」

異能という名の暴力（後書き）

はい、また新しい人出てきたぜ。すみません、まだまだ増えます、
が、今回出てきた白雪はかなり主人公達に関わってきます。でもっ
てキャラ濃いです。自分が楽しければいいという野郎です。暁留と
は何年か一緒に住んでいました。暁留が歪んだのはおそらくその数
年間のせいだと思われます。また従兄弟同士で一緒に住む前から仲
は良かった様子。とある事情により雨欺一族の一部を憎んでいます。
気に入らないものは身内であろうと徹底的に排除するため一族から
は今世紀最悪の奇跡と呼ばれています。ちなみに親しい人たちから
は惚れ惚れするほどの鬼畜外道と呼ばれていたりします。雪白さん
についてはまた次回。

白色という名の硝子玉（前書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！狂喜乱舞しております！
これからもよろしくお願いします！

今回はほんのすこし残酷描写があります。といってもやはり大したものではありません。

白色という名の硝子玉

「雨欺白雪。暁留の従兄だけど？」

「信用できませんね。私はあなたのことを知りませんから。私が雨欺の誰かを知らないなんてそんなことがあるはずありません。」

「すごい自信だなあ……。」

「やっぱり記憶を消されちゃってるわけね……あんのクソ爺。」

「てめえ、とつととUSBを渡せつつてんだろぅが！こそこそ隠れやがって。」

「あ、見つかつちゃった。」

「いいのかな、そんなにのんきに構えてて。」

「さあ、撃たれなくなきゃとつとと渡せ。」

「うん。あのさ、僕今雪白の記憶を戻すのに忙しいんだ。だから君たちとは遊んでられないの。ごめんね？」

「そう言つて、銃を引き抜き撃つ。その間約数秒。そこにいた悪人（？）が全員倒れる。」

「何それ？」

「ん？麻酔銃。ただしかなりの威力。便利だよ？殺すこともないしね。」

「よく空港で何も言われませんでしたね……。」

「んーだつてほら向こうの空港の人も雨欺が何人かいたから。つていうかきみ誰？」

「あ、申し遅れました。私、深桜仄と申します。」

「深々とお辞儀。いかなるときにも礼儀は大事。」

「ふうん、で、暁留の片翼なのか。深桜ねえ……あの深桜？」

「はい、あの深桜ですね。」

「ややこしいのを片翼にしたなあ……ま、惚れたもんは仕方ないか。しっかし桜門六花かあ……あーあ、色々面倒事が起きそうだね。君、本家？分家？」

「生粹の本家令嬢です。」

「うわー……ま、なんかあったら協力はするけどさ。本家令嬢ねえ……ほんつと面倒。」

自分でもそう思いますよ白雪さん。

「で、あなたはどちら様ですか。」

銃を向けたまま訊く雪白。うん、怖いよ、なんか殺気が感じられるよ。

「だーからー雨欺白雪だって何度も言ってるだろ？偽名じゃないよ。本名だよ。君こそ自分のことちゃんと分かってる？」

「私は雨欺雪白です。それ以外の何でもありません。」

「本当に？」

そう言つて雪白を見つめる白雪さん。笑顔けどなんか……怒ってる？

「本当です！」

「君の名前は誰からもらった名前？」

「そんなの両親からに決まって……決まって……」

「君は何色？」

「白色です。」

「誰からもらった色？」

「私の色は私の……」

雪白の銃を持つ手が震えている。

「ねえ、君は誰？」

「私……私は……」

「君は白なんかじゃなかったでしょう？君はただ色を映し出すだけの……」

「そう、私は色を映し出すためだけの硝子球……あれ……？」

足まで震え始めた。大丈夫かな？

「さあ、君の名前は何？」

「私は……私は……私は……誰？」

「その問いには昔ちゃんと答えてあげたでしょう？」

白色という名の硝子玉（後書き）

はい、雪白が何がついてなくていわゆるが付いてるかお分かりになりましたか？硝子玉については活動報告のほうで書くと思いますが、要するに《色》がついてないんですね。雨欺は色を持つ一族ですから彼女は異端なんです。それを白雪が好き勝手染め上げた。こうして雪白が出来上がったのです。ちなみにこの名前は改名されたもので、元の名前は硝子ナンバー009とかいうふざけたものでした。さすがに役所には硝子で出したんでしょうが。この話は長くなるのでいずれ番外で書きます。

雪白、白雪。名前がさかさまだけなのは、偶然ではありませんよ？理由があるんです……。

愛情を捧げられる存在という名の片翼（前書き）

短め。そろそろ亀より遅い更新になりそうで危うい。できるだけ頑張ります……。

愛情を捧げられる存在という名の片翼

「私は、ただの器。」

雪白は崩れ落ちる。それを見ながら問いを続ける白雪さん。

「そう、何を入れる器？君はどんな存在？」

「私は、溢れんばかりの永遠の愛を捧げられる存在。」

「そうだね、誰の？」

「私は、白雪さんの、溢れんばかりの愛を捧げられる存在で、片翼。愛情で満たされた器。」

「満点の答えだね。」

にっこりと微笑む白雪さん。雨欺の微笑みだ。

「白雪さん……？」

「まさかと思うけどそれって誰とか言わないでよ？」

「……なんでいるの？だって渡米したのに、私を置いて行ったのに。」

「帰ってきたからいるんだよ。もう二度と置いてったりしない。ごめんね、一人にさせて。辛かったでしょう？ってまあ記憶を失ってみたいだからそうでもないか。」

「ごめんなさい、ごめんなさい。大事なことを忘れててごめ……なさい……。」

泣き始めちゃった雪白を立たせて抱く白雪さん。

「うん、許す許さないは後にして、とりあえず……。」

あ、もう好きにしちゃってください。ただここには生徒がいるのでほどほどに……

「許可くれない？」

そっちかよ！

「ん、好きにしてください、許可あげますから。」

「いいのかなあ……雪兄この人間じゃないのにねえ。」

あ、ここの人間じゃないとやっぱり許可って与えにくいんだ。

「さてと、」

白衣のポケットから何か出してる……あ、糸？

『幻想を現実……』

『糸をエネルギーに変換。』

糸は光り輝く真つ白な球に変換された。

『エネルギーは縄に変換』

白い球は縄になる。

『現実幻想を持ち込めば人は恐怖を覚える。君たちもまたしかり。さあ、幻想と現実の狭間にあるどこよりも白く、エネルギーの溢れる幻想の雪原で作られたものに溺れる。』

縄は悪人たち三人を縛り付けた。

「ま、こんなもんでいいか。」

「ええと……それで……私を許してくれますか？」

今にも泣きそうな顔で言う雪白を見ながら白雪さんは甘く微笑んだ。

愛情を捧げられる存在という名の片翼（後書き）

特に書くこともないなあ……ううむ。なんか小話が書きたい気分。
リクエストがあれば教えてください。もしかしたら書くかも。（す
ごい曖昧ですみません。私は基本こんな人間です。）

同居という名の結婚一歩手前（前書き）

前回と同じくらいの長さ。

同居という名の結婚一歩手前

「ん？許さないよ？永遠に許さない。僕は君をずうっと思つていたのにその君は僕のことを忘れてたなんて許せるわけないでしょ？」

「それじゃ……それじゃ私はどうしたらいいんですか……？」

「そりゃあ僕に一生を捧げるくらいのことはしてもらわないと。」

「捧げます。」

さらっとすげえこと言つたぞこの子。

「じゃ、籍入れよつか。」

「はい、入れま……はい？」

「雪白の誕生日、もう終わつたでしょう？君は十六、僕は二十四。法律上何の問題もない。年の差はまああるけどそんなのどうってことないよね。だって雪白は僕に一生を捧げるんだもんね。」

確かに問題はない、問題はないけどさ……

「で、でも、心の準備が、あ、う。」

「それもそうだね。じゃ、とりあえず一緒に住もつか。」

「え。でも、私本家に今住んでるんですよ？」

「あ、暁留の家の隣の土地買い占めたから問題ないよ。二人で住んでも有り余る広さだし？」

つてことはなに、私の隣の隣の家ですか。マジですか。雪白が近くにいるのは嬉しいけどさ……

「家なんてそんなすぐに建つものじゃ……」

「僕を誰だと思つてるのかな君は。物質を変化させることについては雨欺一と謳われてるんだよ？家を建てるくらい簡単だよ。一時間もいらないね。」

それはすごいな。暁留でも家を建てるのには一週間かかったし。

「僕のモノになってくれるよね？」

雨欺の微笑みをたたえてる白雪さん、綺麗だけど怖いです。モノつてあなた雪白をどうするおつもりですか。

「え、う、あ。」

「ねえ雪白、君はこの僕を……この雨欺白雪を溺れさせておいて一人平然と陸にいたんだよ。僕は君がいらないことで余計に深く深く溺れていったのにね。それでようやく少し海に来たのにまた出ていくつもり？ そんなの許さない。おいで、雪白。来たら深く溺れさせてあげるよ？ 昔よりも深く。」

いや、あんた何様だよ。

「分かりました。でも一人はやです。溺れるなら二人で……」

「もちろん。」

あーあ、堕ちちゃった。白雪さんの圧勝ですね。

同居という名の結婚 一步手前（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！幸せすぎて視界が滲んでおります。

ああ、また書くことがない。あ、そうそう。仄亞の家の左隣に暁留の家、その隣に白雪さんの家（予定）となっています。仄亞の部屋から暁留の部屋は見えるしその逆もちろん可。窓からの行き来も可能となっております。お、書くことあったわ。

楽しかった日々という名の恐ろしかった日々（前書き）

楽しかったのは白雪さんだけ。

楽しかった日々という名の恐ろしかった日々

「てかさ、雪兄、あの土地って学園長が持つてる土地だよ？」

「あーうん。知ってる。買い占めたっていうかまあ脅し取ったというか。」

何をしたんだあんた。

「僕さーここ寄る前に実家……本家のほう寄ったんだよね。そこでいい土地探してもらおうと思って。んで、なんか小さいのがいたからその子に、本家から遠くて、学校に近くて、ついでに暁留の家から近い空き地ない？って聞いたらありますけどって言われたからその子に許可をもらった。」

「そんなこと許されてないはずなんですけど……。」

「最初は断られたよ？でもちよつと遊んだらすぐに了承してくれたよ？」

本当に何をしたんですかあなたは。

「何したのさ雪兄……。」

「えー……秘密。」

絶対になんかした。この人絶対になんかすごいことした！

「大丈夫だって。暁留が考えてるよりずっと普通だと思うよ？」

「雪兄の大丈夫はあてにならないよ。ね、雪白。」

「ええまあ。大丈夫だってって言われて数分後なんとか組の家に連れて行かれた記憶が。」

「何やってるんですかあなた……。」

多分雪白や暁留が八歳九歳の時の話だと思っんですけど。

「そのおかげで逃げ足は速くなったでしょう？」

「いやまあそうだけどさ。あの時どれだけ僕らが怖い思いをしたかなんかいかついおじさんたちが追ってくるんだよ？こっちは武器すら持っていないのに。」

「そうですよ。向こうはたくさんの武器を持っていたのに私たちは

丸腰ですよ？」

しかも小学生だよ。私だったらトラウマになるよ。多分。

「いいじゃない。別に何があったわけでもなし。終わりよければすべてよしだよ。」

「あのね……それはまあましとしても色々他にもあったじゃん。大丈夫って言われて見た映画が……今思い出しても気持ち悪くなってきたんだけど。」

「暁留さん。ダメです。あれを思い出したら男の人をまともに見れなくなりますよ。」

「よく二人とも腐らなかったよねえ。」

なんとなく分かったんだけどさ、それってR指定ついてるんじゃないの？ねえ。

「そのおかげで君たちは多少まあ誰かがいかわしいことをしていても無視できるでしょ？」

「それならせめてノーマルにしてくれたってよかったじゃないですか。」

「あれ、アブノーマルにアブノーマルをつぎ込んだやつだったじゃん。」

よかった。その時に知り合いじゃなくて本当に良かった……！

「んー僕の趣味。」

「雪兄。半径一メートル以内に近寄らないでくれる？」

楽しかった日々という名の恐ろしかった日々（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分は高級ホテルに無料で泊まれる気分です！これからよろしく願います>（―――）<

暁留の半径は冗談です。実際特に彼らは同性愛者に何か感情があるわけではないので。片翼以外はどうでもいい人たちですし。まあ白雪はちよつとあれですが。彼らが見た映画にモデルとかはありませんけど、どんな物語だったかといえますと、まあちよつとわけありなカップルがアブノーマルなことをしていたんでしょね。特に何とは書きませんが。R指定が付いていたに違いない。

従兄弟という名のほぼ兄弟（前書き）

残酷表現はないんですけど白雪さんが暴走してとんでもないことに男同士でじゃれてます。あくまでじゃれてるだけなのでまあ特にこれといった問題はないと思いますが一応警告。感覚でいえば仲のいい兄弟のじゃれあい？っていうか兄の一方的な押し売りを弟がいやがりつつも受け取ってます。

従兄弟という名のほぼ兄弟

「つていうのはまあ冗談で、実際はあれくらい見れたら他はもうなんでも来いだろうと思って。それにあれ見たら多少のことは許してくれるかなって。」

「白雪さんって雪白のことが好きなんですよね？」

確認。

「うん。世界で一番愛してるよ。」

「じゃあ暁留まで巻き込む必要性はなかったんじゃない？」

「ああ、僕、暁留のことも普通に好きだから。好きなものはとことん愛するのが僕の信念。」

ちよつと待て。これは私はどう反応すればいいんだ。

「気に入ったものに男も女もないでしょ？」

こんな生徒の目の前でよく言えるな。私は特に何も思わないけどさ。
「あ、安心して。暁留に悪戯はよくしたけど、そこまですごいことはしてないから。」

されてたら困ります。

「で、本家の子にもそういうことをしたんですか。」

「まっさか。気に入ったわけじゃないし。ウチにしては珍しく純粹無垢で驚いたけどさ。」

気に入ってたらしてたんですか。

「じゃあ何したのさ？うわ！？」

白雪さんが暁留に背後から抱きついて耳元に顔を寄せて、甘く囁く。

「こーいうこと。」

「っ！」

「これを免疫のない子にやっただんですか？」

「うん。ただ囁いただけ。問題ないでしょ。」

いやいや、さっきの声はなんか腰にクル感じの声でしたけど？

「早く解放してよ。もういいでしょ？」

「えー……つれないこと言うなよ。僕と暁留の仲でしょ？」

耳元に口を寄せて、舐め上げる。ここは怒るべきところなのかな？

「雪兄！」

さすがに焦ったのか暁留が声を上げる。それを見て笑いながら冗談だよと囁く白雪さんは悪魔に見える。

「もうヤダ。っていうか仄亞もなんでなんか言ってくれないの。」

「え、ああ……なんか嫉妬するタイミングを見失った。ごめん。」

白雪さんがからかっているの分かったし。

「白雪さんの場合からかい続けるから問題なんですよ。」

ああ、そういう感じるなあ。

従兄弟という名のほぼ兄弟（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！猛暑を潜り抜け、クーラーのきいた部屋に入った瞬間の感じを味わっております。どれくらい幸せか分かっていただけますか？

さて、白雪ですが、男女関係なく愛する人です。恋愛的に愛しているのは雪白オンリー。で、暁留は兄弟的な愛。友人には友情に近い愛。だから、同性も異性も両方いけるといふのはちょっと違います。まあ雨欺の人間ですから、片翼の性別が何であれ愛したんでしょうけどね。

優しい兄という名の鬼畜外道

「つていうかそこまで嫌がられるとこっちもちよつとショックなんだけど。」

「だって雪兄の目が本気だったんだもん。」

「九割は冗談だって。一割はあれだ、気に入ったものは愛したいから。」

「もうちよつと他の愛情表現にしてよ。」

「もっとハードなのがいいって？仕方ないなあ。お兄さん頑張るよ。」

「激しく違う！」

「ま、冗談だけど。」

あーあ、また遊ばれてるよ。でもこれだけ暁留が全力で止めようとしてるってことは前科があるんだね。

「あ、そうだ。仄ちゃん。君のこともね。気に入ったからね。」

「その好意は送り返すことは可能でしょうか。」

こつうのは見てるのが楽しいわけで。当事者にはなりたくない。

「駄目。だから遊ぼうね？」

「お兄ちゃん、可愛い妹の貞操の危機だよ。」

「いや、俺に言われても困るんだけど。お前の貞操とか暁留に譲渡したし。」

勝手に譲渡されてた！

「仄ちゃん。さすがの僕もそこまでではないから。」

「仄、忘れてるかもしれないけど雪兄は雨欺だから。」

あ、そっか。片翼相手にしかそういう欲求は抱かないんだっけ。

「それに雪兄はそりゃあ困ったところもあるけど基本的には優しいお兄さんだよ……うん。たまに惚れ惚れするくらい鬼畜外道だけど、気に入られてれば特に被害を受けることはないし。」

「うん。とっても困ったところのある人だよね。」

「ひどいなあ仄亞ちゃん。お兄さん傷つくわ。」

だって事実だし。

「あ、そうそう。あのさ、後々色々言われると誤解を招くから今言っとくと、僕、アメリカでは女除けのために男好きという設定になつてたから。」

「ついに手を出しちゃったんですね……。」

「違う違う。向こうに気の合う奴がいてね。そいつに頼んで彼氏役してもらっただけ。そいつとはただの友人だし。」

よくそんな役してもらえたなあ。

「よくそんな役してくれましたね……。」

「ああ。なんか女除けって言ってた。彼女がいるとかじゃなくて単に女嫌いらしいよ？まあ男好きってわけでもないらしいけど。」

「いや、ていうかさ……よくその他の男の人から言い寄られなかったね。」

確かに。白雪さん、綺麗だもんね。

「そいつも綺麗な顔立ちだったしね。それでも言い寄ってくる奴には向こうの苦手分野の話振って、ついてこれないの見て、この程度の会話についてこれないのはダメって断った。」

最低だなおい。

優しい兄という名の鬼畜外道（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！本屋で自分の好きな作家さんの新刊を見つけた時くらい幸せです！

雪兄さんはやりたい放題ですね。本当。アメリカでもさぞ周りに迷惑をかけたおしていたんでしょうね。ちなみに彼氏役をしてくれた人は後々出てきます。

紫陽花という名の雨欺（前書き）

ちよつとだけ長め。

紫陽花という名の雨欺

「カナちゃんはどんな会話にもついてこれたからねえ。」

「カナちゃん？」

男だね？

「ああ、カナメっていう名前だったんだよ。奏でるに芽吹くの芽で奏芽。だからカナちゃん。」

嫌がらせ以外の何でもないですね。

「ちなみに本人の許可は取っておりません。」

やっぱり。

「仄亞ちゃんは仲良くしといたほうがいいかもね。あいつも桜門六花の人間だから。」

「そうなんですか？」

「うん。紫陽花。紫陽花奏芽。漢字見たら本当に女みたいだね。」
いや、白雪さんが言うのもどうかと思うんですがね。

「しかもシヨウカカナメってちょっと言いづらいよね。」

まあ何回か言ったらわけ分からなくなりそうな名前ではあるけど。
「でもその人男なんでしょ？あんまり家の中で偉い人じゃなさそうだね。」

「ああそうだね。一応本家の人間ではあるらしいんだけど、男だからって海外留学もできたみたい。僕と一緒に戻ってきたから今は日本にいます。」

桜門六花は一部を除き女が上位だからね。

「っていうかあいつは色々特殊なんだよね。嫌だけど学園長に要報告。っていうかなんであいつ死なないの？いつ死ぬの？」

「お前くらいだよ。わしにそんなこと言えるのは。」

「あ、おじい様。ご無沙汰してます。」

「仄亞ちゃんはこのなに礼儀正しいのにの。」

「黙れクソ爺。ちよっと一回死んでこい。」

この人は雨欺山吹さん。うちの学園長にして、雨欺の前当主。かなりの権力を握った人物なんだけど……。

「で、何を要報告なんじゃ？」

「やっぱり言いたくねー。」

「白雪。」

「でもまあ言わないとまずいから言うと、奏芽は雨欺と紫陽花の混血。」

え？ちよつと待ってよ。桜門六花と雨欺って基本的に仲が悪いんじゃないの？

「んな馬鹿げた話聞いたことないぞ！」

「いや、でもそうだし。色は紫だったかな？原色ではないにしろかなりの力があるよね。」

「ちよつと待ってください。そんな話聞いたことありませんよ？」

「なんかね、結婚する前に子どもができて、男のほうはその後事故で死亡。女のほうは正式な片翼にはなってなかったから死んでない。本当は駆け落ちするつもりだったらしいよ。」

そんな話があるんだね。

「で、女のほうはまだ結婚せずだつて。紫陽花だからなせることだよね。」

紫陽花は結構規則とかがなくて緩い家らしいからね。恋人の氏索性さえばかせばあとはどうにでもなったんだろう。

紫陽花という名の雨欺（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！ついに二桁です！幸せすぎて周りがお花畑に見えます。本当は灼熱のコンクリートジャングルですが。

さて、山吹さんですが、色は山吹色。雨欺の表の前当主。白雪さん曰く頭の固いジジイどもの傀儡。ちなみに暁留がおじい様と呼ばないのは彼も山吹さんが嫌いだから。白雪さんの影響。それなのに彼の一番の被害者たる雪白はおじい様と呼んでいるのはきつと性格が出ているに違いない。仄亜は彼に好かれていたら利があるからおじい様。腹黒いなあ本当。

友人についての報告という名の天地がひっくり返る報告

「でもって、その女は本家の一人娘だから後継ぎに死んだ弟夫婦の娘を自分の娘ってことにして育ててるんだってさ。ね？要報告でしょ？」

「要報告どころか天地がひっくり返る報告だ。どうしてくれる。」

「ざまあみる。」

本当におじい様が嫌いなんだね。白雪さん。

「というかどうしてそういう大事なことを言わないんだ貴様は。」

「雪白をこっちに寄越してくれたら教えたよ。」

「黙れ若造。」

「じゃあてめえも黙れジジイ。お前誰の許可があつて雪白を使つてんだこの野郎。」

いや、雪白はモノじゃないから。使うとか許可とかおかしいから。

「使えるから使つて何が悪い。お前だつてよく言っていただろう？」

「はっ！笑えるねえ。硝子は見捨てたくせに。ちよつと使えるようになればすぐに利用しやがつて。あんたらなんて死ねばいい。」

「家に牙を剥くとはいいい度胸だな。」

「はあ？僕一人捕まえられないくせに何言つてんの。僕が牙を剥く前から負けてるんだよ。あんたらはさ。」

「黙れと言つてるだろうが若造が！」

銃口が白雪さんの眼前に現れる。だけどその前に。

「おじい様。あまり血圧を上げるのはよくないと思いますよ。」

おじい様に銃を向け微笑む雪白と。

「学園長。いくら雪兄が困った人でも一応僕の大事な従兄なんだ。同じくおじい様に銃を向ける暁留がいた。」

「だから言つたよね。勝ち目がないんだよ。特にここではね。」

ゆつくりと銃を出し、おじい様の眉間に向ける白雪さん。確かにここじゃあね。白雪さんの味方ばかりが集まつてるわけだし。

「……はあ。落ち着いて話をしようじゃないか。」

「うん、そうだね。」

あの、おじい様に銃が向いたままですけど。完全に何か下手なこと言えば死んじやう感じじゃないですかこれ。

「で、その男は今どこにいるんだ。」

「日本のどつか。」

「教えろ。」

「教えたらカナちゃんが研究されるんだよね。じゃあ言えないな。言っとくけど彼のこと、かなり気に入ってるんだ。何かしたらただじゃおかないよ?」

だから微笑まないで下さいって。怖いですって。

「白雪!」

「うわ!？」

友人についての報告という名の天地がひっくり返る報告（後書き）

暁留や雪白は雨欺の人間ではなく雨欺白雪の人間なわけです。仄亞は傍觀。彼女は雨欺暁留の人間ですから。特に白雪さんのために動こうとはしません。今のところ。あと、山吹さんに牙を剥くと面倒だと思ったんでしょうね。白雪さんと山吹さん、どちらにいたほうが利があるか、現在品定め中。自分で書いてて思いますが本当にいやな女だな。この子。

最大の刺客という名の猫

「うわ!？」

誰かが扉を壊れそうな勢いで開けて、白雪さんにタックルをかましてきた。

「お前はなんてことをしてくれたんだ!」

「えーとカナちゃん?」

え?この人が奏芽さん?

「一体お前は何を考えてるんだ!」

「カナちゃん、地が出てるよ。ほら、少し落ち着いて?」

「誰が落ち着けるか!死ね!」

「うえええええ!?!一体何を怒ってるわけ?」

「しらばつくれる気が!」

「えーと本家の純真無垢な男の子をちよつとばかり遊んだこと?それはさつきも言ったけど大したレベルじゃないんだよ?嫉妬しないでよ。」

「はあ?お前ついにそつちに目覚めたのか?っていうかそんなことじゃない。」

「じゃあ何?」

「……本当にお前知らないのか?」

「だから何のこと?急に抱きつかれて怒られても意味が分からないんだけど。いくら僕が賢くつたつてこれはちよつと予測しにくいよ。もしかしてウチから刺客が送られてきたとかそういう感じ?」

賢いとか自分で言うか。っていうか抱きつかれて……いやまあ確かにそう見えないこともないよ?ないけどさあ……。

「ある意味最大の刺客がな……家に猫がいたんだ。」

「はい?」

それってそんなに怒ることなの?

「厳密に言つと猫耳と猫の尻尾をはやした女子高生がいた。」

「それはまあ……なんというか。」

「それもベツトの上で無防備にすやすやと寝ていた。」

「なんか男の理性を試されてる感じがするね。」

「とりあえず起こして、話を聞いたところお前の家の人間だということが判明した。」

あれ？それってもしかして……。

「それで？」

「その女子高生が好みだったんだよ。で、俺の好みを知ってる人間はお前だけで。しかもお前の家の人間だって分かったらもう疑うしかないだろ？」

「なるほどね。要は力ナちゃんに僕が彼女候補を送ってあげたと思ってるわけだ。でも違うよ。」

「……そうか。疑って悪かった。」

最大の刺客という名の猫（後書き）

奏芽さんは基本的にいい人。数少ない白雪さんの友人。これが務まるってことは相当神経が丈夫に違いない。

小話 メイド服という名の最強の武器（前書き）

PV5000アクセスを超えました！皆様ありがとうございます！拙い物語ですがこれからもよろしく願います。この記念に小話を一つ。（私が書きたかったんです。すみません。）

本編より少し未来のお話。馬鹿みたいなお話ですが……こんなものですみません。R-13くらいのお話です。長め。

小話 メイド服という名の最強の武器

さて問題です、家に帰って部屋に入るとメイド服の彼女が自分のベッドで寝ていました。この場合どうすればいいのでしょうか。

白雪の場合

「……………どうしよう。本当。」

「ふえ……………ん、おはよーございます白雪さん……………」

あ、起きた。

「ん……………ってああ！いま何時ですか!？」

「えーと午後八時をすぎたあたりかな。」

「ふみやああああ！！！！！！」

うん、そんなに驚くことかな？こっちとしては君のその服装のほう
が驚くことなだけだね。

「ええと……………今、帰ってきたんですか？」

「うん。ごめんね、遅くなって。カナちゃんやら晝留やいろんな
奴らと飲んでたから遅くなった。」

未成年に酒飲ますっていいのかな？ま、あいつ強いし問題ないか。
雨欺だし。体への悪影響も特にないし。

「雪白は何してたの？」

「え、あ、仄亞さんたちとお茶しました。」

幸せそうに微笑む彼女。よほど楽しかったんだね。

「ってそうじゃなくて！ええと……………お、おかえりなさいませご主人
さま？」

小首をかしげて上目づかいで見上げてくる少女、うん、これは……………。
「間違いなく理性が飛ぶ……………!」

まずいよ。まずい。これは、まずすぎる。襲いかねない。何この破

壊力。

「あ、あの上手く出来てませんか？ご主人さま。」

「いや、もう十分すぎるくらいです。」

可愛すぎるんだけど。襲いたくなるくらいに。無茶苦茶にして壊したい。ってそれはさすがにヤバいか。

「ご飯出来てますよ。一緒に食べましょう？」

「うん、そうだね。」

にしても、一体こんなこと誰が教えたんだろう？雪白が考えたわけじゃないだろうしな……。

暁留の場合。

そうそうに彼女を起こし、わけのわからないご挨拶をされて……まあとにかく聞くことは一つ。

「なにしてんの。あ、襲われなくなったの？」

「違うよ。可愛いでしょ？」

昔からよく無茶をした彼女。この程度では驚けない。

「今日はみなでお茶したんじゃないの？」

「うん、で、男の落とし方の話になってね？で、こういうシチュエーションを皆様に伝授しました。」

うわぁ。やることがえげつない……雪兄とか大丈夫かなあ？

「これ、白と黒でそこまでコスプレって感じもしないし、雪白にも似合いそうだから作ってもらってみた。ちなみに可愛いからってタダだった。着心地も最高。」

一体誰が作ったのかな。これ。黒と白のワンピースのようなメイド服。確かに露出も少ないし、お茶をした彼女ら全員に似合いそうではあるけれどね。

「似合う？」

「似合うねえ。」

ああ、無茶苦茶にして壊したい。しても怒らない気もするし。てい

うか誘ったのそっちからだし。問題ない気がする。

「ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・」
「ご飯。」……最後まで言わせてよう。」

言わせるか。ていうかなこと言われたら大変なのは仄亞だと思うよ？こっちも理性の弦が切れそうなんだから。

「で、今日は楽しかったの？」

「うん、楽しかったよ。」

幸せそうに微笑む彼女。うん、楽しかったんだね。泣いてぼろぼろになって、ただただ僕しか見れないようになった彼女も好きだけど。これはこれでいいと思う。

「そう、よかったね。」

「うん！今日のご飯はグラタンだよ。美味しいと思う。」

「じゃ、ただこうかな。」

「どうぞ、ご主人さま？」

うん、とりあえずご飯の後にお風呂に入って……そのあとは分かってるよね？仄亞？そう思っていると、彼女は微笑んで。

「壊れても愛してね？私だけのご主人さま？」

……完敗。

小話 メイド服という名の最強の武器（後書き）

はい、ばかばかしい話につきあっていたきありがとうございます。
R-13で問題ないですよ……ね？ええ、暁留のほうが。問題ありませんです。

白雪と暁留は似ていますね。でも相手の違いからか途中からだいぶ違ってるような。ちなみに、彼らは一日別行動をしていて、暁留達は奏芽の家で飲み会。メンバーは本編ではまだ出てきていない人々＋桐生、暁留、白雪、奏芽。で、仄亜達は雪白の家でお茶会。メンバーは本編ではまだ（以下略）＋仄亜、白雪。両方とても楽しいものになったのではないかと。

ああ、ひとつ言い忘れが。皆様、未成年の飲酒は許されることはありません。作中では簡単にやっていますが、未成年の方がいらっしやいましたらくれぐれも真似をしないようにお願いします。

友人という名の玩具（前書き）

酔った勢いで行動って恐ろしいものがあるよねお話。

友人という名の玩具

「別にいいよ。ていうか僕がカナちゃんに恋人候補なんて送るわけないじゃん。そんなことしたらカナちゃんが僕のモノじゃなくなっちゃうからね。」

「いつ俺がお前のモノになったんだ！」

「ん？約六年前。」

出会ったときからですか。そうですね。奏芽さんが絶句している間にも白雪さんは言葉を続けていく。

「僕カナちゃんから盛大に告白されたよ？」

「いつ！」

「二十歳の時の夏。カナちゃん酔っちゃってたから覚えてないかも。」

「……俺、なんて？」

「秘密。」

「俺、お前に何かした？」

「ん……押し倒されたような。」

「はいいい！？」

あ……奏芽さん、酔った勢いとはいえ……それはどうかと個人的には思うぞ。白雪さんみたいなのにそんなことしたら後々話のネタになるに決まってるじゃないか。

「ていつてもまあ単純にカナちゃんがふらついてベッドに倒れこんだときにたまたま僕が目の前にいただけなんだけどね？」

「よかった……心底よかった……！」

「あとさつきも言ったように盛大に告白されたけど。」

「すいません、酔っていたのでその話はなかったことに。」

なんかどっかで聞いたことのあるようなセリフだな。

「うーん……いいの？」

「いいのも何も。むしろとっと忘れてくれ。」

「そう、カナちゃんに僕に友人として好きだと言った告白を無かったことにすると。いいよ、じゃあ今からは赤の他人と言うことで。」
悪魔だ。悪魔がいる。ここに悪魔がいますよ！

「ちよっと待て。」

「なんでしようか、奏芽さん。」

うわぁ……。奏芽さん真っ青だよ。友人じゃなくなったことに真っ青なのか、今の白雪さんの口調に真っ青なのかはよく分からないけど。

「気持ち悪！」

あ、後者だったのね。

「っていうか、あー……。さっきのセリフはなかったことにしていただけませんか。いや、だって俺、お前のことそういう意味では……その……嫌いじゃないし。」

なにこのツンデレ。奏芽さん顔真っ赤だし。

友人という名の玩具（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分は三十度を超えない日が来た瞬間の気分です。皆様熱中症にはくれぐれもお気を付けくださいね。（つていう私が危ない。でも頭痛持ちの日々立ちくらみしてる人だからどこからが熱中症かわからない。）

さて、見事に転がされてますね、奏芽さん。まだまだ彼の苦難は続きます。頑張れ奏芽。

愛情を確かめ合う行為という名のただの苛め（前書き）

残酷表現はありません。

愛情を確かめ合う行為という名のただの苛め

「んー……泣いて懇願するっていうなら考えんでもないけどね……？」

悪魔の王が！王がいらっしゃいます！怖いです！なんですかこのいじめっ子の微笑みは！

「えーと……俺はの場合どうすれば……。」

うん、すごく気持ちは分かるよ。

「経験談から言えば、まあとりあえず慈悲を請うべきかと。」

「ちよつと待て、君はなんでそんな経験があるんだ。」

無論どこぞの紅い瞳の野郎にやられたことが幾度となくあるからですがナニカ。

「そもそも俺慈悲の請い方とか知らないんですけど。」

「えーとですね、自分の必死さをアピールするわけです。」

まあ確実に相手に苛められるんだけど、最終的に最初に提示された命令よりは簡単になるからね。

「白雪さん、いやですね、俺の友人とかお前しかいないわけですよ。いやまあ他にもいますけど、あれはまあなんていうか違うといえますか。」

うわぁ……すごい必死な眼だ。あれ。

「そんなに僕が大事なら泣いて懇願するくらい出来るよねえ。」

うわぁ……すごい苛める気満々の眼だ。あれ。嗚呼、哀れな子羊に合掌。

「助けて……。」

私のほうを見ないでください。そんな必死の眼で。

「もういつそ泣いて懇願したらどうですか。」

「君はそれをやったわけ？」

「ええと……厳密に言うそうですね、ごめんなさいと泣きじゃくりながら言いました。もう絶望に満ちて、救世主はあなただけなんです

の眼で言いました。っていうか本当にそれしかなかったし。もうプライドとか何それですよ。まあ二人きりだからできたんでしょうけど。相手の要求を全部飲みました。恥なんて捨てましたよ。どぶに」

ちなみに過去何回もしました。どこぞの紅い瞳の野郎はめっちゃくちや満足げにしました。

「いったいいくつの時の話……？」

「十歳から十二歳までの間ですね。後これから。」

嗚呼、さようなら。私の平穏だった生活。まあ後悔はしていないけどね。

「で、俺にそうしろと。」

「いえまあ人前ですし、せずつにどうにかする方法もきつとどこかにありますよ。」

それを探すのは面倒だからしないけどね。私は。

「白雪……？」

「なに？」

「えっと……その……す、好きだから許して？」

なにこの人。男のくせに破壊力があるんだけど。

「……くっ」

「白雪？」

「くっくっく……あはははは……やばい。カナちゃんがあまりに面白すぎる。あっははは……」

笑い続ける白雪さん。いいなあこんなので終わって。私なんてお許しが出るまでに一時間以上かかったのに。

愛情を確かめ合う行為という名のただの苛め（後書き）

仄亞もかなりの苦勞人ですね。本人特にどうでもいい感じですが。

幸せな未来という名の心配すぎる将来（前書き）

短め？

幸せな未来という名の心配すぎる将来

「あー面白かった。こんなもの見ちゃったら許すしかないよねえ。」
「雪兄って甘いよねえ……。」

「というかあなたがしつこすぎるんです。」

「そうかな？」

「僕なら泣いて懇願して壊れて狂っておかしくなるまで苛め倒すのに。」

「うん、仄亞ちゃん、君の将来がものすごく不安でならない。」

「いえ、もう慣れましたから。」

慣れた自分が怖い。まあ、実際こういうことが原因で逃げたわけじゃないしね。何一つ問題ないんだよね……悲しいことに。

「だって雪兄、壊れた仄亞はものすごく可愛いんだよ？必死で僕だけを求めて。それに、それでもしなくちゃ逃げられちゃうかもしれないでしょ。」

いや、そうされても逃げましたよ。

「逃げられてたじゃん。」

「精神的には逃げられてないから。ね、仄亞。」

「まあね……刑事ドラマの手錠とか、大縄の縄とか見ると過剰反応しちゃうしね。」

精神的に逃げる事が出来たことなど一度もない。

「うん、一体君たちは小学生のくせに何をしていたのかな？」

「えーと……あー……。」

「健全に遊んでました。」

嘘です。

「健全な遊びに手錠も縄も出てこないよね。」

ええその通りですとも。警察ごっこしてましたなんて言えないしな……どーしましょ。

「大丈夫。責任は取るから。」

「大丈夫です。特に何があつたわけでもありませんから。」

「仄亞ちゃん、今度僕とゆっくりお話ししようね。君の精神は一部壊れてる気がするからね。」

「それは二人きりでつてことですか？」

「うん？駄目なの？」

「いやあ、駄目というか……。」

「その場合苛められるのは私のほうなんですが。」

「本気で何してきたの君らは……。」

「どうやら呆れられているようです。」

幸せな未来という名の心配すぎる将来（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分は目の前の山積みの仕事（課題）が一気に片付いた気分です！これからもよろしく願います。

さて、更新頻度が恐らく低くなるかと。理由は私生活が忙しくなってきたため。できれば今のペースで頑張りたいのですがね。恐らく三日に一回くらいになる気が。とりあえずやれるだけやってはみますが楽しみにしている方がいらっしやいましたら申し訳ありません。それでも読んでいただければ幸いです。

本題という名のついさっきまで忘れていた存在

「ああ、大丈夫だよ。雪兄となら特に問題ないし。」

「あ、じゃあ大丈夫です。」

「もしかしてなんだけさあ……仄亞ちゃん、遊びに行ったりするのにいちいち暁留に許可取ってたりした？」

「さすがですね……基本的にいつでもどこでだれとどのように何をしたかを言わされましたね。暁留と遊ぶのには許可も何も要りませんでしたけど。当たり前ですよ。」

こうなると面倒になってきて結局暁留とばかり遊ぶという悲しきループ。

「それを受け入れた仄亞ちゃんが心底すごいよ……お願いだからこの馬鹿を見捨てないでやってね。仄亞ちゃん以外にこいつの《片翼》が務まるとは思えないから。」

「だろうね……自分でもびっくりだもん。」

「そんなにひどいかな。僕。」

「何してたかは想像するしかないけど恐らくひどすぎるよ。」

「うーん……特に何をしたわけでもないんだよ？」

確かにまあそこまでひどいことは……されましたが。

「まあ愛情があると思えば……。」

うん、耐えられないこともない。

「仄亞ちゃん、辛くなったら言ってね。どうにかするから。」

「辛くなることなんてないよね、仄亞。」

「そーですね……ははは。」

よし。何かあったら白雪さんのお家に直行しよう。うん。

「なんだろう、ものすごく哀れに見えて仕方がない。」

「ですよ……私、暁留さんの《片翼》じゃなくて良かったって、心底思いましたもん。」

いいよな、部外者どもは。

「とりあえず暁留は後でゆっくりお話ししようね。さてと、本題に戻そうか。」

うん存分にお説教してください。で、本題ってなんだっけ。

「あー……えーと、そう、俺の家にいる猫の話。」

あ、それだ。と言いますか奏芽さん、あなたも忘れてたよね。完全に。

「うん、あの子って本家にいたんじゃないの？」

「ああ、一年ほどで我慢の限界が来たようです。逃げてその後行方不明……っていう言い方はおかしいですね。学校には登校していませんから。住所不明が正しいのでしょうか。」

「じゃあ本家には戻れなさそうだね。」

「かなり罵って出て行きましたからね。」

すごい勇気だな。

「うーん……ウチの利益になるものがあればいれるんだけどね。」

「そういうお前はウチに迷惑しかかけていなかったのう。」

「黙れジジイ。」

「すみません。私のせいですよ。私が硝子だったから家から出れなくて……。」

「というか本家の野郎どものせいだよ。あいつら異端を苛めるの好きだねえ。趣味悪。」

別名よわいもの苛めとも言う。本当に趣味悪いな。

「仄亞とか雪白だったら喜んで本家に迎えられそうだけどね。」

「私を持ってて利益なんてないよ？」

むしろ損害しかないと思うよ。

「僕をどうにかできるって時点でかなりの利益。それに仄亞は色々と僕が仕込んだからだいぶ役に立つんじゃないかな。」

いつの間にか仕込まれてたわけですね。ははは……。

「でもあの子は特に誰かが仕込んだわけでもないしね。うーん……子ども産むくらいしか本家に戻る術はないかな。」

「そもそも彼女に本家に戻る意思がないですよ。」

あ、そっか。それが問題だね。

「親のところに行かそうにも海外は色々アウトだしなあ。行き場がないね。」

なんだろう、今後の展開が読めてきたんですが。

本題という名のついさっきまで忘れていた存在（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。気分は好きなアーティストさんが新しいアルバム出した気分です。これからもよろしく願います。

白雪の友人と暁留の《片翼》どっちも大変そうですね。（他人事）ちなみに腹黒度でいくと白雪＞暁留。俺様度でいくと白雪 暁留。歪み度でいくと白雪＜暁留。サディスト度でいくと白雪 暁留となっております。どちらかというと暁留は友人相手に優しく《片翼》に容赦なし。白雪は友人に容赦なく《片翼》には優しいです。

スカウトという名の腐れ縁の存続

「ね、カナちゃん。」

「何でしょうか……いや、言いたいことはなんとなくわかるけども。」

「その猫飼わない？」

「やつぱり……あのな、俺は今職がないの。就活しなきゃならないの。そんな余裕はねえ。」

「あれま。すごい大変なんだね。今不景気だし。」

「それなら大丈夫。僕が雇うから。」

「は？」

「だから、僕が雇ってあげるって言うてるの。っていうかまあスカウトだね。カナちゃんは優秀だから。ぜひともウチにほしいなと。」
「そう言って一枚の紙をひらひらと見せる白雪さん。」

「研究所……ってお前こんなもの経営してたの？」

「経営していたというよりは高校卒業までそこに勤務して、その後譲り受けたが正しいな。」

「……そんなんアリ？」

「特例。まあ学業に支障はなかったし。いつ行ってもいいって言われたから。たいして顔出してないな。」

「そりゃあ経営者になってからはアメリカにいたわけだしね。行けるわけないよね。」

「で、俺にここで働けって？」

「いやなら無理にとは言わない。でもいい話だと思うよ？いつ来てもいいし、お給料は結構あるし、そこに成果を上げれば臨時ボーナスも入るし。好きなだけ研究できるんだよ？」

「確かにかなりいい話ではあるよね。まあ問題は……。」

「……で、そのかわりに俺は何をすればいい。」

「そう、問題なのは条件。いい話ほど裏がある。これ重要。」

「一つ言つとすれば、雨欺のために働くんじゃないで僕のために働くことかな？」

「……それだけ？」

「うん。あ、ごめん。もう一つ。その猫が大学卒業するくらいまでは養ってやってほしい。その二つが条件だね。」

「本当にそれだけなんだな？」

「うん。それだけだよ。」

それならこんない話はないと思う。猫アレルギーとかでなければ分かった。条件を吞もう。なんか手続きとかいるのか？」

「ありがとう。これにサインしてくればいいよ。あ、英語でよろしく。」

紙にサインしていく奏芽さん。うーん……あの万年筆高そうだなー……いくらかな？

「白雪の名前つてさ、偽名だと名前から読んでもおかしくないけど本名だとかなり読みづらいよな。」

Sirayuki Amagi……読みづらいといつかなんか変な感じ。ま、Kaname Siyokaもだいぶ変だけどね。

「大丈夫。暁留もたいがいだし。」

Akito Amagi……うん。変だね。といつか雨欺って言う名字がすでに変だしね。どうしようもないよねこれ。ってちょっと待って。その場合私は……Honoka Amagi……

「うわー……。」

微妙すぎるわ。結婚するのやめたいわ。

スカウトという名の腐れ縁の存続（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分は偶然自分好みの洋服を見つけた時の気分です！これからもよろしく願います。

切らせてくれない腐れ縁。

机の整理という名のプライバシーの侵害（前書き）

R - 13 くらいな感じ。 会話が。

机の整理という名のプライバシーの侵害

「そうそう。桐生なんて普通に読んだらKiryu Mioってなるから桐生ミオっていう別の人間っぽくなるし。」

「かわいそうに。お兄ちゃん、どっかに婿入りしたら?」

「それだけの理由で婿入りってどうよ。」

まあ冗談だけどね。

「はい、出来たけど。」

「はいどうも。これどうぞ。ないと研究室に入れないから。なくさないようにね。」

「どーも。ってお前俺の証明写真なんてなんで持ってんだよ。」

「ああ、机の中探ったらあった。」

「何勝手に人の机探ってるんだよ。」

本当だよ。プライバシーはどこだよ。

「えーだって一緒に住んでた仲だし。そういうこともあるだろうと想定したうえでのルームシェアだよ。」

「お前と同じ寮になった運命を呪いたい。」

「ご勝手にどうぞ。」

そっか、同じ寮部屋か。……本日何度目かの奏芽さんに合掌。

「カナちゃんへの愛からこういう行動に出たんだよ。」

「そういうのを俗にストーカーというんだよ。知ってたか?」

「まあ冗談だけどね。カナちゃんが優秀だったから目をつけてただけ。ま、優秀じゃなくても友人だったしどっか紹介したんだろうけどね。」

「たのむからもう二度と人の机をあさるなよ。」

「え?」

心底意味が分からないという表情を浮かべる白雪さん。いや、だからプライバシーの侵害ですよ?

「お前まだやる気か。」

「うーん……カナちゃんは面白くなかったからなあ……まあ雨欺だし、いいんだけどね。」

「は？」

「いやあ、十八も過ぎたんだし？やらしー本の一つや二つ。」

「そういうお前も何一つ持ってたねーだろ。」

「何言ってるの。カナちゃんが気づいてないだけです。」

「ふえ！？」

声を上げたのは奏芽さんじゃなくて雪白。うん、そうなるよね。

「どうしたの？」

「う、え。いえ。そうですね。記憶のなかった私がどうこう言うのも変ですよ。なんでもないです、ごめんなさい……。」

あ、しよぼくれた。捨てられた子犬みたい。

「あーもう、ほんつとに可愛いね。持ってるわけないでしょ？雨欺なんだしさ。僕は雪白じゃなきゃダメなの。まだ分かってないの？」

……分かってないならみつちり教えてあげなきゃね……？」

「え、あ……で、でも確かにそっちのほうが。いや、でもそれはなんていうか倫理的に、あ、でもだめ。それはだめで。ん、あ、ふえ！？それはもう倫理とかの問題じゃなくて、でもあ、喜んでくれるなら別に、つてでも……ああ！そんなことは！」

なんかすごい想像してるなこの子。

机の整理という名のプライバシーの侵害（後書き）

雪白の知識が豊富な理由は白雪さんのせいに違いない。

学校という名の神聖なる学び舎だったはずの場所（前書き）

短め。あとやっぱり会話がちょっとアレ。

学校という名の神聖なる学び舎だったはずの場所

「んん、あ、それがいいかな。うん。」

「で？どういう結論に落ち着いたのかな？」

「ですからその少しずつ慣らす方針で……ってええ！？」

「全部声に出してた。一体何がリンリテキにダメで、何がリンリとかのモンダイじゃないのかな？教えてよ。」

雪白の顔はリンゴよりも真っ赤。対する白雪さんの顔はニヤニヤ。いじめっ子。

「い、言えません。」

「じゃあ実践する？」

「ダメです！」

「一体何を想像したんだろうね。ものすごい気になるわ。」

「なあ。」

「なんですか？」

「いやあ、少しずつ慣らしていくとかいってる点でもうアウトなんじゃないのかな。」

「奏芽さん、そこを突っ込んだらダメです。こういうのは見てニヤニヤしとくのが正しいんですから。」

あ、また赤くなってる。何があった。

「ね、雪白。——っっていうのはどう？」

「ダメに決まってるじゃないですか！なんでそんな知識ばかり豊富なんですか。」

「じゃあ——は？」

「っ！」

分かってる雪白もずいぶんと豊富な知識をお持ちのようで。あ、耳食まれてる。

「いいの？ストップかけなくて。」

「一応学校なんだけど。」

「うーん……ま、雪兄もそこら辺は分かってるでしょ。大丈夫なんじゃない？」

「あ、白雪さ……ん……」

「可愛いよね。本当に。壊したくなってくる。」

「ねえ、ほんとうに分かってるのあの人？」

「……分かってないかも。」

「ここは神聖なる学び舎だつて。雨欺の野郎どもめ。」

「これ以上は帰ってからね？」

「……これ以上するんですか。」

「無論。嫌ならいいんだよ？ 雪白からねだるように仕向けるだけだし？」

「……分かりました。」

あ、諦めた。まあ諦めなかったらこれ以上ひどくなるだけなんだけどね。

学校という名の神聖なる学び舎だったはずの場所（後書き）

言い訳させてください。全部あの白い野郎が悪いんです。奴のせいで神聖なる学び舎が汚されているんです。《色》は白のくせに中身は残念な色なんです。あと雪白の知識が無駄に豊富なのも奴のせいなんです。雨欺の野郎め。

小話 お説教という名の安堵（前書き）

PV10000アクセスを超えました！これも皆様のおかげです！拙い物語ですが、これからもよろしくしてくださいと幸いです。

さて、その記念に小話を書きました。本編より未来のお話ですが大して時間は関係ありません。中身ゼロな彼らの日常生活。雨欺は怒らせたらだめですよ。というお話。
結構長め。この後日談は今度書きます。

小話 お説教という名の安堵

「まずい……」

かなり怒ってるに違いない。

「どうしようか。」

私と雪白で百貨店に行った。ここまでいい。問題は知らない間に時間が夜になっていたことだ。

「電話、したくないなあ……」

まず携帯を開けたくない。サイレントにしていたせいでさっぱり分からなかったけれど大量の着信履歴が残っているに違いない。

「なんで今七時なんでしょうね……。」

ほんとだよ。

「でもこのままだと余計に怒られますから、とりあえず白雪さんに連絡して、車で送ってもらいましょうか。」

「うん。間違えても晧留には連絡したくないわ。」

そんな命知らずなことできません。

「ちよつと待つてくださいね。」

雪白が電話をかける。

「すぐに来てくれるみたいです。」

「それはよかった。」

のかどうなのか。それって晧留に会う時間も早くなるんだし。どうせ車に乗ってるんだろうし。

数分後、車到着。

「とりあえず中入って。」

はい。晧留さえいなければひとも入らせていただきたかったです。

「あの、私電車で……」「仄亞。」はい、ごめんなさい。」

泣きたいです。誰か助けて。

「あのねえ、二人とも。ちゃんと時間くらい考えなさい。」

「はい。」

「まあ気持ちは分かるからあんまり怒りたくはないんだけどね。」
「「ごめんなさい。」」

反省しています。本当に。

「まあ出て行った時間も時間だし。分からなくはないけどね。」
ええ、出て行った時間、三時頃でした。

「これからはこういうことはないようにね。」

「「本当にすみませんでした。」」

「こっちはすごく心配したんだから。」

ええ、着信履歴を見たら分かります。

「二人とも自分がそれなりに狙われる立場なんだから。」
そうですね。

「自覚しなさい。少しは危機感を持ちなさい。大変なことになるのは君たちだけど、心配で狂いそうになるのは君たちじゃないんだよ。」

分かってます。

「分かったね？」

「「はい。すいませんでした。以後気をつけます。」」

これでお説教はおしまい。僕も怒るの好きじゃないから。と言って白雪さんは運転に専念し始めた。さて、問題は……

「暁留？」

「何。」

地獄の底あたりから声が聞こえましたよ今。

「あのね、心配かけてごめんなさい。」

「……」

え、無視ですか。

「携帯サイレントにしてて、気づかなくて、それで……」
駄目だ。怖くて何も言えない。泣きそう。

「別に怒ってるわけじゃないんだけどさ。」

嘘。怒ってるじゃん。

「怒ってるんじゃないくて、安堵しつつ激怒してる。」

「ごめんなさい。」

うう、もう駄目。泣いちゃうよ。

「雪兄が言ったことが言いたかったってのは分かってるよね。」

「分かってる。」

かすれたような声しか出ない。怖いよ。

「お願いだからこつちを振りまわさないでよ。」

「暁留、そんなもんでいいだろ。仄亞ちゃんだって反省してるんだから。」

白雪さんが神様に見える。

「どうして言うことが聞けないかな。」

「ごめ……なさ……」

あ、駄目、涙出てきたよ。

「まあ家でゆっくり話そうか。それと、躰直し。」

私、明日生きているか心配ですよ。

「暁留。お前の気持ちは痛いほど分かるけど、ほどほどにしてあげなよ。」

「雪兄には関係ないから。」

「仄亞ちゃん、頑張ってね。まあ自業自得だし。」

うう……分かってますよ。

その後、私たちは各自自宅（私の場合そうじゃないけど）に入っ
て……え、その後どうなったかって？それは別のお話で。

今回の教訓 怒らせる相手は選びましょう。

小話 お説教という名の安堵（後書き）

本気で怒ると怖いのは白雪さん。今回のことはどうやら許容範囲っぽいです。それでもお仕置きはするでしょうね。楽しいから。

P M 6時半頃。

白雪「遅いねえ……」

暁留「護衛に連絡してみてくれない？」
連絡。

護衛「あの、非常に言いづらいのですが、二人とも時間を忘れて楽しく買い物をしてらっしゃいます。」

白雪「いつ気付くかな……楽しみだねえ。」

暁留「……とりあえず心配させた分のお代は払ってもらわないかね……」

こんな感じ。今日も護衛は女二人の知らないところで頑張っている。

後日談、いつ書こうか……。

遊びという名のいわゆるイカガワシイこと（前書き）

更新が一日遅れた挙句にちょい短めとかいう状況。すみません>
――<

あと白雪の野郎がまたR指定つきそうなことを喋ってます。ほんっ
とうにすみません>――<

遊びという名のいわゆるイカガワシイこと

「ていうかさ、僕に触れられるの、そんなに嫌なわけ？ 雪白も暁留もさ。」

「いえ、嫌ってわけじゃないんですけど。その、心臓が壊れちゃいそうで。」

白雪さんが我慢できない理由がよおつく分かった。これは、犯罪級の可愛さだわ。

「僕の場合は単純に変な扉を開けちゃいそうで怖いだけ。別に雪兄に触れられるのが嫌ってわけじゃないよ？」

「二人ともほんと、いい子だねえ。」

ぐしゃぐしゃと二人の髪をなでる白雪さんはいいお兄さんそのものや、今までの会話から考えると残念な人なんだけどね？

「いい子過ぎて一緒に遊びたくなって来るよね。」

……あれ？

「それは謹んで辞退したいのですが！」

「待って雪兄。なんでそうなったの。」

本当だよ。

「久々にいいじゃん。遊ぼうよ。」

「どっちの意味で。」

「いわゆるいかかわしいほうで。あ、仄亞ちゃんも一緒にどう？」

どうしましょうかね。いや、さすがに暁留が喰われるとかはやだし。かといって自分が喰われるのもちよつとあれだし。

「んー……鑑賞だけなら可で。」

「ちよつと待って。色々と問題が。」

だって暁留が楽しくなった姿とか見てみたいもん。基本的にやられっぱなしだしさ。

「いいじゃない。仄亞ちゃんに見られてもさ。」

「いや、プライドとかプライドとかプライドとかさ。色々あるんだ

って。」

主にプライドが許さないのね。

「それに絶対雪兄本気出すもん。」

あー……Sだもんね。そうなるよね。

「誠心誠意心をこめて遊んだげるよ。」

「嫌すぎるよそれ。」

「あーでも見たいわそれ。」

すっごい見たい。で、白雪さんに色々と教えてほしい。

「じゃ、行こうか。」

「そうですねー。」

平然とついていこうとすると、さすがに担任からストップがかかりました。

「まだ終礼中だからな。」

「あ、そーでしたね。」

そう言えばそうだった。

「えーと特に質問とかないですよね？」

「「「ありまくるわ！てかもうどこから突っ込めばいいのかわからんわ！」「」」

あ、やっぱり？

遊びという名のいわゆるイカガワシイこと（後書き）

ははは……真剣にR指定が必要そうで怖いよこれ。どうしましょうね。仄亞もね、喰われるだのやられっぱなしだの言わないでほしいよね。本当に。ええ、分からない方はそのまま育ってくださいね。

Q&Aという名のただのバカップルの会話（前書き）

更新遅れてほんとうに申し訳ありません……

Q & Aという名のただのバカップルの会話

「結局雨欺先輩と深桜さんはどんな関係なの。」

「愛情があるタイプの婚約者。」

「恋人同士になるのかな?」

あー正式な告白とかしてないけどまあ恋人同士かな?色々歪んでるけどね。

「で、どこまでいったわけ。」

「えーと……どう説明するべきよこれ。」

「んーキスはしたよね。」

ついさっきもな。

「いわゆる男女間のアレコレは……してないことになるのかなあ?」
微妙なんだよね。こう、あまりに歪すぎて。

「考えてみれば普通の行為はしてないよね。デートもしたかと言われれば微妙だし。」

「なんかその辺曖昧だよな。」

目隠しされたり縛られたり。そういうことはあっただけど。

「今度仕切りなおす?」

「んーどっちでもいいよ。」

今更って感じだしね。

「二人で映画とか行っただけど特に甘い雰囲気にもならなかったしね。」

「普通すぎるくらい普通だったよね。」

だって元は幼馴染みたいなものだしね。慣れがあって照れがない。

「まあそんな感じ?」

「はあ……。」

あれ?なんか諦めの目線みたいなのがちらほらとある気がするよ。

「じゃあえーと馴れ初めは。」

「ややこしすぎるからお答えできません。」

だつて面倒だし。

「強行突破。」

「あーそれだ。」

そうそう、そんな感じだね。こう、無理やり押し切られたみたいな。

「……はあ。」

なんか諦め目線増えた!?

「いつから付き合ってるの。」

「私が十歳の時。確か六月。」

何日だったかは忘れた。

「えーと確か六月二十三日だね。」

あ、そうなんだ。雨だったことぐらいしか覚えてないよ。

「あれより前の暁留は優しかったよね。」

猫かぶってたから。

Q&Aという名のただのバカップルの会話（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！忙しいためにこの頃更新が遅いですがつきあっていただければ幸いです。

彼ら、男女間のアレコレは歪なことならやってるけど普通のこととはしていません。

トラブルメーカーという名の唯一叱れる存在（前書き）

なんとか更新できました……。遅れてすみません。

トラブルメーカーという名の唯一叱れる存在

「何、あっちのほうが好みなわけ？」

「うーん……こっちのほうがやっぱりいいかな？」

猫かぶった暁留は今じゃ変な感じるもん。

「それはよかった。」

「昔の私のほうが良かった？」

「まさか。今のほうがいいに決まってるでしょ。」

「ありがとう。」

「……はあ。」

何だろう、ちよっとバカップルてめえら場所考えるよな目線が増えた。

「で、不純異性交遊はしてないだろうな。」

「……ごめんなさい。」

先生、どこからが不純かどうかは知りませんが少なくとも純粹ではないです。

「愛はあるからいいんじゃない？何かあつたら責任は取るよ？」

「……はあ。」

え、先生まで溜息ですか。

「責任とかの問題もあるけど、それ以上に傷つくのは仄亞ちゃんだから。そこらへんをよく考えなさい。傷は残るんだから。お前が一番知っているだろう？」

あ、そこは結構ちゃんとしてるんだね。白雪さんも。

「大丈夫ですよ。もう何があっても傷つかない気がしますから。」

「そう言っても泣くのは仄亞ちゃんなんだから。自分の体は大事にしないさい。暁留になんか遠慮しなくてもいいんだからね。」

「じゃあ雪兄は我慢できるわけ？」

「そりゃあね。暁留と同じ状況なら我慢したよ。両方学生なんだから。最悪の事態は招かないように。」

そうですよね。ってあれ？

「今の状況だったら我慢しないってことですか。」

「僕もう成人してるし、収入も安定してるもん。」

「……それ、ずるくない？」

「まあそれでも最悪の事態は招かないようにちゃんとするけどね。まあ雪白がまだ十六だもんね。」

「それが暁留にはできないだろうから言ってるの。」

「そんなことないよ。」

「何年見てきたと思ってるの。暁留の性格ぐらい分かってるよ。お前一回何か始めたらそれに集中して他全部忘れるだろ。」

ああ、よく分かります。この人仕事に集中し始めたらご飯も食べないんです。

「……そんなこと、あるけど。」

「だから危ないの。まあ集中できることはいいいことだけだね。」

「本当に白雪が帰ってきてよかった……。」

「おじい様？」

心底安堵した様子のおじい様。どう見ても白雪さんは確実にトラブルメーカーですよ？

「暁留を叱れるのはあいつだけじゃから。」

「ああ、それはよく分かります。」

誰かの言うことをちゃんと聞いてる暁留なんて初めて見た。

トラブルメーカーという名の唯一叱れる存在（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！これからもしょしくお願いします>（――）<

白雪は結構しつかりしてます。昔色々あったから。後、余談ですが雨欺は基本的に中絶することは認めていません。能力が高いものが生まれる可能性がありますからね。

隣の席の子という名の交際相手として申し分ない子

「でもね、雪兄。」

「でもないの。」

「雪兄はどっちの味方なの。」

「どっちの味方でもないよ。」

「仄亜が誘うのが悪いんだよ。僕は何も悪くない！」

「いや、悪いのはどう考えてもお前だから。どうせろくでもないやり方で仄亜ちゃんを手に入れたんだろ。」

ええ、その通りですとも白雪さん。よくお分かりで。

「あの、先生。私の席ってどこですか？」

「ああ、窓際の列の一番後ろ。視力は問題ないと向こうから連絡が来たからそうしたんだが。問題ないか？」

「ええ、ありませんよ。」

問題と言えば隣の席の子かな。さっきから視線をやたら感じるんだよね。あの子から。特にお兄ちゃんに話しかけた時に。

「じゃあとりあえず終礼を進めましょうか。」

「え……いいのか？」

「全く問題ありません。」

彼らの喧嘩を見てると恐らく数時間くらい余裕で過ぎちゃうからね。

「えーと……よろしくね？」

とりあえずお隣に挨拶。

「ええ、よろしく。私は瀬戸実希。好きに呼んでちょうだい。」

ああ、そう言えばそんな名前だったなあ。

「ん、よろしく。実希。お兄ちゃんと被るから私は仄亜でいいよ。」
そう言っただけはルーブリーフとシャーペンを取り出す。

『実希ってお兄ちゃんのこと、好きだよね？』

それをそつと渡す。先生がこっち見てなくてよかった。声を出しそうな実希だけどなんとか出さずにすんだらしい。

『なんで、分かるのよ。』

『見てたら分かるよ。やたらと視線を感じたし？』

最初は暁留狙いかと思ったんだけどそれにしてもおかしかったんだよね。暁留と話してるときには好奇の視線しか感じないし。

『秘密にしておいてくれると嬉しいんだけど。』

『もちろん。ついでに手伝ってあげるよ。』

実希ならお兄ちゃんの交際相手として申し分ないしね。

『ありがと。』

『いえいえ、どういたしまして。』

「つつーわけだ。はい、終礼終わり。つと深桜、これ、止めて。」

これ——暁留と白雪さんの喧嘩。

『面倒です。』

「お前以外がどうにかするのはできないからな。仕方がない。諦める。」

「そーですねー……仕方ないな。奥の手。とりあえず暁留のところで行ってつと。」

「暁留。」

「何？」

あんまりこういうこと人前でしたくないんだけどね。

「仄亞？用が無いなら呼ばないでほしいんだけど？」

それが恋人に対する態度か。

「ちよつとねー覚悟をねー……はあ。」

あーやだなあ。したくないなあ。

「ま、しょうがないよね。」

暁留に近づいて……ほんの一瞬だけ距離をゼロにする。

「……え？」

うん、これでおとなしくもなるでしょ。

隣の席の子という名の交際相手として申し分ない子（後書き）

恋人に対する態度が悪いって？いやあ、彼はそういう人ですよ？
暁留は一つのことになら夢中になっただけは排除する人です。恋人だろ
うがなんだろうが。現在白雪を言い負かそうと必死だったのでこう
なったと。なんだこの恋人にしたいくない野郎ナンバー1はとか言わ
ないであげてくださいね……作者もそう思ってますけどね！

ロづけという名の自爆（前書き）

更新遅れてすみません。頭痛がひどいです。はぁあ……温度変化め。

口づけという名の自爆

「仄亞、人前なんだけど。」

「うん、知ってる。」

だからしたくなかったんだって。自分からキスなんてさ。顔熱いし。今ならインフルエンザの時並みの高熱出てるんじゃないのこれ。

「顔、真っ赤だよ？」

「言わないで。」

分かっているから。一番理解してるから。

「可愛いね。」

「言わないでったら。」

「本当、僕の目より赤い。」

「言わないでってば！」

恥ずかしいんだからね！

「僕がさつきしたやつのほうが長いのに。」

「だってあれは私からじゃなかったんだもん。」

自分からだから恥ずかしいの。分かってば。

「そんな顔して……」

「……そんな顔ってどんな顔よ。」

「苛めたくなる顔。」

最悪だよ。

「今僕のことしか考えてないでしょ。」

そうだよ、もう周りとかあんまり目に入っていないよ。とりあえず恥ずかしいし、苛められそうだし……。悪いか！

「可愛いね、ほんつとに可愛い……ゾクゾクする。愛でたくなるね。」

暁留の羨ましいくらい綺麗な指が頬をなぞっていく。ますます顔が熱くなる。

「なんでこんなに可愛いんだろうね……」

リス英語だったよ。あと、りざいんしか聞き取れなかったよ。

「あー……分らないのか。もっと簡単に言おうか。You should give up」

「もう一回お願いします。」

「You should give up」

ああ、ギブアップね……え？

「あなたは、諦めるべきだ？」

「正解。」

「助言でも何でもないじゃないですか。」

ロづけという名の自爆（後書き）

え、英語が多少間違えていても何も言わないで上げてください。電子辞書で頑張りはしました。

暁留君はDSです。んでもって白雪にーさんはSです。力関係でいえば色々あるから白雪>暁留ですが。

小話 躑躅直しという名の歪んだ愛情（前書き）

PV15000アクセスを超えました！これも皆様のおかげでございます。てめえらちよつとは自重しろとか言いたくなる物語ですがこれからもよろしく願います。

小話 お説教という名の（以下略）の続き。 R - 13 ～ 15 をうるちよろする感じの話です。

小話 躰直しという名の歪んだ愛情

入りたくない家に入れられる。とりあえず手洗いうがいを済ませ、椅子に座る。

「久々だね。仄亞が悪いことするの。」

「ごめんなさい……反省、してます。」

もう当分お外でないかと思ってしまっくらいに反省してます。

「ま、心配した分はきっちり返してもらっからね？」

「うん……」

今回に関しては私が全面的に悪いのでおとなしくします。

「んーどーしよっかなー……」

ああ、死刑宣告を待つ囚人の気分ってこんな感じかな……？

「ああ、そうだ。僕、ちよっと仕事があるんだよね。付き合ってもらおうかな？」

「え……」

晧留の仕事は基本的に私に手伝えるものじゃない。だって、そこらへんに蔓延るヤクザさんや、その他諸々の雨欺にとつて悪である人々を殺すとか、よく分かんない人間に害をなす異形を殺すとか、そういうのじゃなきゃ、パソコンでハッキングしたり、株価を意図的に変動させたりそんなだもん。

「ああ、大丈夫だって、そんなに青ざめなくてもさ。別に誰かを殺せとか、ハッキングしろとかは言わないよ。ちよっと付き合ってもらうだけ。」

いや、その「ちよっと付き合う」が怖いんですが。そう思っている私に晧留は微笑みかける。さながら天使のように。そして、さながら悪魔のような命令を下す。ついでに人なんて虫けら以下だと言わんばかりの冥府の神のような瞳で。

「とりあえず、パソコンに向かいたいから、足置きにでもなって？」

……え？

現在暁留はパソコンに向かっている。よく分からないけど、たまにキーボードを叩く音が聞こえる。

現在私は……とりあえず楽しい状況ではない。

「まあ、こんなもんかな。とりあえず。」

あ、ようやく終わった。

「も、いい？」

「足置きは喋らないよね。基本的に。それから、まだやることあるから。」

そろそろきついんだけど、この姿勢。

「水、飲んでくる。」

そう言つて暁留は部屋を出て行つた。

「つ、疲れる……」

四つん這いの姿勢つて意外と疲れるものなんだね。あまり知りたくなかった事実。あと、足を組みかえられるたびに辛いんだけど。これもあまり知りたくなかった事実。姿勢を崩して、寝転がる。ほどなくして、暁留がミネラルウォーターを持ってやってきた。

「何やってるの？」

太陽も凍りついちゃうんじゃないのかな、この冷たい瞳で見られたら。

「あ、う。」

「誰が姿勢崩していいって言つた？」

「ごめん……」

だつて崩しちゃだめとも言わなかったもん。いや、言いわけしたら火に油を注ぐことに、というか、この状況なら氷に塩を振った状態になる気がするので言わない。

「ま、いいか。水、飲みたい？」

「うん。」

だつて喉が渴いてたんだもん。

「じゃあ、飲ませてあげるね？」

えーっと……

「口移しで。」

「それで、おしまい？」

今日の躑直しは。

「んー……ま、結構な時間だしね。その後、押し倒されてくれるってなら許してあげる。」

それは特に異論がない。というかむしろ結構嬉しい。いや、物として扱われるよりかは数億倍ましですよ？

「痛いことしないって言うならいいよ？」

そう言っと、暁留は天使の頬笑みを浮かべ、耳元で囁く。

「了解。ま、無茶させちゃったしね。」

結局暁留には負けてしまうわけで……今回は完敗、かな？

小話 躰直しという名の歪んだ愛情（後書き）

たまには暁留君にも勝たせてあげようじゃないか。という感じ。

いいお兄さんという名の残念なお兄さん（前書き）

ちよつと長め？

いいお兄さんという名の残念なお兄さん

「どうしようもないもん。自業自得。あ、そうそう。resignは運命なんかに甘んじて従うって言う意味。You should resign yourself to your fate.直訳すれば、あなたは運命に身を任せるべきだってとこかな。」

「結局諦めるってことじゃないですか。」

「うん。そういうこと。ついでに英語のお勉強。resignをこの意味で使う時はresign oneself to 目的語で使います。辞職するという意味もあります。そっちのほうがよく出てくるんじゃないかな？あ、fateは運命ね。」

「なるほど。お勉強になりました。ところでなんで発音がイギリス英語なんですか？」

「アメリカにいたんだよね？」

「好みの問題。暁留も雪白もイギリス英語の発音じゃないかな？僕が教えたから。」

「そういえばそうだね。なるほど。白雪さんの好みでそうだったのか。」

「にしてもずいぶん流暢な英語ですね。」

「そりゃあ何年も向こうにいたからねえ。」

「英語で分からないことがあつたら聞かに行きます。」

「英語に限らず何でも教えられるよ？」

「雪兄の教え方は上手だよ。」

「そうなんだ。よし。聞きに行こう。数学とか数学とか数学とかね！」

「仄ちゃんならタダで何でも教えてあげるよ。」

「ああ、気に入られたからか。本当、いいお兄さんだね。基本は。」

「保健体育もね？」

「これさえなければほんつとにいいお兄さんなのにね……」

もう半ば諦めてるけどさ。

「でもそれを凌駕するくらい教え方は上手いですから。」

「あとそれを凌駕するくらい基本はいいお兄さんだから。」

それはなんとなく分かってるんだけどね。

「まあ家庭教師料と思えば安いものか……お金渡すより遥かにいいし。」

「本当に一回ちゃんとお話ししようね。やっぱり君の考えは一部おかしいからね。」

「そうですか？」

普通だと思っただけど。

「うん。すごく普通じゃないよ。」

おかしいなあ、普通にしているはずなのになあ。

「あとね、仄亞ちゃん。」

「はい？」

「敬語、面倒でしょう。」

「それでもないですよ？」

身内と暁留と雪白以外の年上には普段から敬語だし。

「長い付き合いになりそうだからね。面倒になると思っよ？」

「まあ確かに。」

知り合いの雨欺（暁留以外）の中では一番長く深いお付き合いにはなりそうです。

「外していいよ？」

「え？」

いやいや、そういうわけには。

「どうせ向こうじゃ敬語なんてなかったし。暁留も敬語じゃないし。

雪白はまあ昔からこうだったからあれだけどさ。仄亞ちゃんは別に誰にでも敬語ってわけじゃないでしょ？じゃあ別にいいよ？」

「白雪さん、でもですね。」

「呼び方もよほど変じゃなきゃ適当でいいし。暁留と結婚するなら僕の義妹になるわけでしょ？好きにすれば？」

うわー……すごい適当な人だ。この人。

「僕の名前呼びにくいしね。」

いや、まあ否定しづらいですが。男の人にこの名前で呼びかけるのは少し抵抗がありますか。」

「本当にいいんですか？」

「仄亞ちゃんは常識はある子だからね。敬語外しても失礼な態度はとらないでしょう？じゃあ好きにしていいいよ。」

まあそりゃ未来の義兄（みたいな人）に変な態度はとらないけれども。

「じゃあす、好きにするね？」

「どうぞご自由に。」

困ったなー……敬語は外すの簡単だけど、どう呼べばいいんだろう。

「んー……雪さん？」

あ、しっくりきた。これ。

いいお兄さんという名の残念なお兄さん（後書き）

普通にしているはず。普通を演じているはず。仄亞さんは利益のためなら何でもやる子です。

残念なお兄さん（笑）はその残念さを吹き飛ばすくらいいいやつ……になる予定なのになあ。おつかしいなあ……なかなかなくてくれません。まあ事実好きな人に対してはいいお兄さんです。嫌いなやつに対しては……さあ、皆様合掌のご用意を。ええ、ただの鬼畜外道となり果てますが何か。まあ暁留も大概そんな感じなんですがね。

兄という名のあだ名（前書き）

知らない間に一週間近く経過。すみません……

兄という名のあだ名

「別にいいんじゃない？事実そう呼ぶ人も……いなかったけど。」

「いなかったの？」

「一番呼びやすそうなのに。」

「ユキって言うのは結構いた。偽名の都合とか呼びやすさとかで。」

ああ、そこに「さん」は誰もつけなかったのね。

「基本的に同輩や年上の人が白雪で、暁留は雪兄でしょ？雪白が白雪さんで、両親は白雪とかユキとかだったし、身内の年下の子は白雪さんとか雪兄さんとか雪お兄ちゃんとか。うん。そんな感じ？」

もののみに「雪さん」がない。言いやすいのに。
「お兄ちゃんだとしてもそこにいるお兄ちゃんか、アキお兄ちゃんしか出てこないから……」

この頃後者はあまり思い浮かばなくなりました。暁留って呼んでるからね。

「いいんじゃない？なくても。」

ま、そうだよな。

「逆に僕は兄って聞くと雪兄しか出てこない。」

「お前、いろんな奴のことそんな感じで呼んでなかったか？」

「本気で僕の兄なのは雪兄だけなの。後はあだ名みたいなもの。」
うわ、最悪だこいつ。お兄ちゃんもそう思ったのか溜息をついていた。

「僕も弟は暁留だけでいいや。」

「先生、空気が怪しくなってきたんで早く号令を。」
なんかアブナイ気がするんで！

「え、ああ。会長。あ、掃除は五班な。」

「きりーつ、れーい、さよーなら。」

ガタガタガタ。私も自分の席に戻って机を後ろへ。

「私何班ですか？」

「瀬戸と一緒にで。」

「分かりました。」

何だろう。実希とも長いおつきあいになりそうだ。

「仄亞、一緒に帰らない？」

「え？ああ、いいよ。って私帰れるのかな？」

担任からの呼び出しはくらわなかつたんだけど。

「仄亞ちゃん、ちよいといいかな。」

「おじい様？」

「白雪と、暁留と雪白も。皆で学園長室に來なさい。」
やっぱり。

「うう、ごめんね、実希。」

「ああ、瀬戸さんも桐生君もいいよ。おいで。」

「いいんですか？」

「遠慮するでないよ。」

「僕、昼ご飯持ってきてないんだけど。」

そうだよ。今日土曜だよ。午前中で授業終了、ってそもそもまあ始業式だけだ。とりあえず今はお昼時だ。

「こつちで用意しよう。そうそう、悪いが奏芽くんは家の猫を持ってきて学園長室へ来てくれるかな。瞬間移動はできるかい？」

「ええ、できます。後からそちらへ行きますね。説得するのに時間がかかりそうなので。」

「よろしく頼むよ。それじゃあ行くかの。」

学園長の後についていくこと五分。ようやく学園長室に到着。無駄に敷地広いよこの学校。

兄という名のあだ名（後書き）

暁留が「兄と呼ぶのは呼びやすいから。別に敬意があるわけではありません。」白雪を除く。こいつには敬意を払ってますから。」あと、最後の奏芽は猫かぶりverです。次話、ようやく教室から脱出。

雨欺という名の恐ろしい世界

「失礼します。」

「おう。」

あれ？部屋に学園長がいないのに声が聞こえたよ？しかも聞き覚えのある声が。

「おー、おかえり。ホノ。」

そこに立っていたのはよれよれの白衣を着た、男。っていつかこの人……

「笙さん？」

雨欺笙月。ここの保健医にして白雪さんと同級生。過去にそれなりにお世話になった人。

「俺があまりに色っぽくなって分からなかったか。」

「いえ、ふつつつつに分かりました。」

最後に会ったときに二十歳越えてたし。

「ま、そうなるわな。んで？なんか、白い髪した野郎が見えるのは俺の気のせいなわけ？できれば気のせいであってほしいんデスケド。」

「気のせいじゃないっての。」

「うつわーマジかよ。なんで帰ってきた。」

仲悪いのかな？この二人って。

「暁留がそろそろやばそうだったじゃん？だから帰ってきた。まさか《片翼》と被っちゃうとは思ってなかったんだけど。」

「連絡ぐらいしろよ。」

「いやあ、サプライズにならないでしょ。」

そんな理由で連絡しなかったのか……さっきから思ってたけど、この人かなり自分中心だよな？

「んで？雪白の記憶は。」

「数分で戻した。あんなばかばかしい術、僕が解けないとでも思っ

てるの？」

どこか馬鹿にした声で言う。いいや、違うな。本当に、馬鹿にしているんだ。この人は。心底、これ以上もなく、馬鹿にしているんだ。雨欺という存在全てを。

「おい、あれはむしろが丸一日かけた術なんじゃが。」

かわいそうなおじい様。才能の違いって恐ろしいね。どれだけもいたって、才能もあり、努力もしたであろう雪さんを超えられない。「だから言っただろう？ 僕が牙を剥く前から負けているって。そういうことだよ。実力主義、あんたらが言っただよ？ 力がないものはいらないうて。喰われたくなきゃ力を手に入れろって。その通りだね。本当。ほんつつつとうに笑える話だね。」

力さえあれば、簡単にのし上がれる、恐ろしい世界。それが雨欺。才能がなければ生き残れず、ただただ自分の人生が喰われていくだけ。

「……無駄に力をつけよって。」

「そこに何か問題でもあるの？」

「……悔しいことに、全く、これっぽっちも、何一つとして、問題ない。」

「それならいいでしょう？ 君たちを馬鹿にしよう。どうだっていいでしょう？ 事実なんだからさ。」

「クソガキが……」

「負け犬の遠吠えって知ってる？」

「白雪さん！」

「何？」

「さすがに、馬鹿にしすぎですよ。私のことはもういいですから。もう、いいですから。ね？ 落ち着きましょう？」

「他にも色々と気にくわないことがあるんだよ。」

この人、心底嫌いなものと好きなものに対する対応が違っなおい。

「ま、でも僕が馬鹿にする相手はここにいるジジイでも、ましてやシヨウでもないからね。」

「ったく。急にキレんなよ。お前のキレ方は怖いんだからな？」

「はいはい。ま、メインディッシュは最後にとつとかないとね。美味しく、料理して、頂かないと……ね？」

舌舐めずりする雪さん。あ、なんか黒いものが見えた。あと地獄が見えた。

「それまでは仄亞ちゃんたちとイチャイチャしてればいいんだし。」

「……ちよつと待て（待つてください）。」「」

三人（すなわち犠牲者になるであろう人々）で一斉に止める。

雨欺という名の恐ろしい世界（後書き）

雨欺笙月……《色》は黄色。能力は高め。晁留達には到底及びません。というか奴らが異常なんですね。保健医。歳は白雪と同じ年。それなりの常識人。

さて、えー多分次の更新は遅くなる……かと。一週間後には更新できと思いますが……不定期ですみません。本当にごめんなさい。

可愛い弟たちという名の美味しそうな食材（前書き）

更新が予定通り遅くなりました。すみません……でもって、短めです。

可愛い弟たちという名の美味しそうな食材

「それおかしいから。絶対おかしいから。」

「そうですよ。なんでそうなるんですか。」

「私、鑑賞しかしたくないんだけど。」

「えーでもね？もうちょっと、限界来ちゃっててね？だってさ、美味しそうな食材がね？並んでるんだよ？これは料理して食べないと。」

「さっきの料理とはまた違って怖いよ！」

「ホノまで喰う気がよ……節操なしめ。」

「いやあ、気にいっちゃったんだもん。美味しそうだし？」

「え、ちよつと待って。話が違うよ。私は鑑賞だけだよ。」

「雪さん、私、鑑賞だけがいいんだけど……」

「何言ってるの。」

「笙さん！」

「助けての目線を送りつける。」

「んー……ま、こいつに好かれちゃったことを後悔しとくしかないわな。」

「そんな！」

「仄亞ちゃん。復習ね。You should resign yourself to your fate.」

「嫌だ！」

「なんだって、運命に身をまかせなきゃならないんだ！」

「大丈夫だよ。痛いことはしないから……ね？」

「そういう問題じゃない！」

「ああ、それとも痛いほうがいい？苦しいほうが好み？」

「うん、違うって即答できない！それもこれも何もかも暁留のせいだ！」

「……どっちもやだ。」

「……うちの愚弟がとんでもないことやらかしちやったまみたいで……」

…ごめんね?」

「本当だよ。どうしてくれる。」

「ごめんね。本当にごめんね。代わりに僕が謝るよ。」

まあ、それはそれとして……んー……さっきから思ってたんだけど

……

「いやまあ雪さんに謝られてもね。にしても本当に仲がいいんだね。本当に暁留と従兄ってだけなの?」

そう、さっきから思っていたんだけど……あまりに二人の仲は親密すぎる気がする。

「あれ? 暁留から聞いてないんだ? ……そっか。」

「何を?」

「んーと、今から話すことは誰かに言っちゃいけないよ? それでも聞きたい?」

んーそうだなあ。

「まあ、それなりに。」

暁留が絡んでるしね。

「僕と暁留は、血の繋がりで言えば紛れもない従兄弟だ。僕と血の繋がりがしかない僕の父親は、暁留の父親の弟だったからね。」

なんか棘のある言い方だね。「しかない」って。

「でも、まあ言ってみれば兄弟なんだよね。」

「は?」

どういうことだそれ。

可愛い弟たちという名の美味しそうな食材（後書き）

ええ、長々となるので、とりあえずここで切ってみました。次回は白雪の過去編。暗い……はずなのになんか暗く感じない。まあ白雪ですからね。ちなみに暗い過去ランキングだと恐らく一位は……あれ？みんな結構暗いよ？仄の苛めも壮絶だし、（のわりに本人どうでもよさげだけど。）白雪も結構すごいし、雪白も異常だし、暁留も結構あれだし……まあ一番傷ついたのは暁留だとだけ言っておきます。本人無意識でトラウマになってるので。

昼ドラも真っ青な過去という名の家族の絆の物語（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。これからよろしくしてや
ってくださいと幸いです。―――

白雪さんの過去編。長め……？

昼ドラも真っ青な過去という名の家族の絆の物語

「養子だよ。養子。僕は、暁留の家の養子なんだ。」

あ、そういうことか……ってえ？

「なんでそんなことになってるの？」

「簡単に言えば僕と血の繋がりしかない僕の両親が育児を放棄したからかな？」

「なんで？」

雪さんは紛れもない白。原色なんだから能力も高い。そんなものを手放すなんて……言い方は悪いけど、もったいない。

「僕の能力が高かったのと、そもそも僕の血の繋がりしかない親はまだ成人すらしてなかったからじゃない？」

「……何歳だったの？」

「僕を産んだ時点で母親が十五歳で、父親が十七歳だったと思う。」

「それは確かに若すぎる……」

「だよ。ガキが子ども育てられるわけじゃないじゃん。そういうことするなら最悪のケースも頭に入れとけて話だよねえ？避妊ぐらいちゃんとしろっての。」

ああ、だからこの人、そういうことにうるさいのか。

「産んでから数日は頑張ったみたい。でも無駄に能力が高かったせいか、そこら辺にあるもの全部エネルギーに変えてたんだってさ。子どもは自分の欲求に素直だからね。こればかりはどうしようもない。そういうのも含めて産めって話だけどそこまで考えられなかったんだろうね。」

「そこまで学生に考えろっていうのは酷かな、確かに。」

「でしょ？で、当時二十三歳だった自分の兄とその嫁に僕の育児を頼んだんだ。まあその後ちよつとした事件が起きちゃってね。僕が十歳の時だ。僕の血の繋がりしかない両親が、子どもを産んで、家にやってきた。それで、これを機に僕を連れていこうとしたんだ。」

ふざけんなって話だよね。弟だ？父親だ？母親だ？知るか。僕の弟は暁留だけだ。僕の父親や母親も育ててくれた二人だけだ。他はいらない。見たくもなかった。」

心底、苦々しい顔で吐き捨てるように、言う。ああ、だからか。だから、「弟は暁留だけでいい」のか。

「それで、どうも僕、キレちゃったみたいでさ。力が暴走したんだって。よく覚えてないんだけど。なんかね、すごかったらしいよ？雨欺の力あるものの九割が集まって対処しようとしたらしい。それでも結局抑えきれなくて僕の身体の限界を待つしかなかったみたいだけ。」

それはもうすごいとかいうレベルですかね？

「僕が覚えているのは病室。僕を化け物だって恐れた血の繋がりにない両親。僕は初めて父親が本気で人を殴ってるのを見たよ。それも自分の弟と、義妹を。殴って、殴って、殴って。自分の妻に止められるまで殴ったんだ。その後、起きた僕と、茫然とていた自分の弟に、養子のお話を持ち出した。こっちは点滴してる身だっつもの。ちよつとは考えろよって話だよね……嬉しかったけど。この意味の分からない、気持ち悪いナニカと、もう二度と会いたくなかったから。」

「で、その人たちは今は……」

「さあ？知らない。知りたくもない。生きているらしいってことは聞いたけど。」

そうか……ま、そうなるか。

「あんな奴らと血が繋がってるってことがおぞましかった。自分もあんなのかと思うと吐き気がした。今は平気だけど当時はすごかったなあ。自分の身体を思いっきり切った。何度も戻した。いやあ、あれはすごかったね。」

いや、そんな軽々しく言っているものなのか？それ。

「そんな日々も時間が経つにつれてそれなりに普通になっていった。後は仄ちゃん知っている通りかな。僕は十三の時に家を出て、

本家に住んで。僕が十六の時に両親が死んだ。
」
なるほど。

「大変な幼少時だね……」

昼ドラも真っ青ですよ。

昼ドラも真っ青な過去という名の家族の絆の物語（後書き）

余談ですが、白雪の父の両親と弟は現在日本で、それも彼の比較的近くで、普通に暮らしています。兄と義姉のお葬式などは出ることができなかったため（雨欺の圧力がかかったため）白雪とは事件後から一度も会っていませんし、弟に至っては自分に兄がいることすら知りません。しかし、断片的に事件の記憶はあるようで、その事件のことを疑問に思っている様子。ちなみにその弟、力も大してなく、平和な毎日を送っています。白雪の弟とは思えないほど純粋です。まあ彼の本当の意味での「弟」は暁留だけということですね。本人の言うとおり。

小話 ハロウィンという名の甘い時間（前書き）

PV20000アクセスを超えました。これも読者の皆さまのおかげでございます。そろそろ作者もヒキ気味な物語ですが、これからもよろしくやってくださると幸いです。

一日遅れましたがハロウィン小話です。前半は過去。後半は現在より少し未来のお話。後半は甘い上にヤンデレ注意報が出ております。ご注意ください。

小話 ハロウィンという名の甘い時間

「とりつくおあとリーと。」

「へ？」

一瞬何を言われたのかが分からなかった。彼女の差し出した手と、壁に掛けられたカレンダーを見て気づく。ああ、ハロウィンか。

「と言われても……」

何もないんですが。

「お母さんがこう言ったらアキお兄ちゃんがおいしいお菓子くれるって。」

なるほど、咲良さんの入れ知恵か。しかし困ったな、何もないって言って悪戯されるのだけは勘弁だ。自分が悪戯するのはいいんだけど。

「ね、アキお兄ちゃん。とりつくおあとリーと。」

「うーんと、仄ちゃんがその意味分かってたらお菓子あげる。」

これで時間は稼げる。

「お菓子くれなきゃいたずらするぞ。」

知ってた！まずい、まずいよこれ。雪兄、こんな時どうしてたよ……いや、そもそもあの人がいつもお菓子持ってたな、フリ。クとかミ。ティアとか、薄荷だけが綺麗さっぱり抜き取られた佐久。ドロップスとか！

「……ちなみに持ってないって言ったらどうするつもりなのかな？」

「うーん……アキお兄ちゃんと遊園地に行きたいな！」

ああ、素晴らしきかな純粋無垢。そんな悪戯なら僕大歓迎だよ。

「じゃあ遊園地でパフェでも奢ってあげるよ。」

「ほんと！？」

「もちろん。準備して？」

そう言っていると、隣家の少女はパタパタとお家へかけて行った。

「trick or treat!」

「Happy halloween.」

僕は持っていたオレンジの飴玉をあげる。

「むう。」

どうやら僕の《片翼》は不満なようだ。

「お菓子、いらないの?」

「あのさー……ちょっとだけ、期待したのにさ? 変なところで鈍いよね、暁留って。」

……ああ、そういうことが。

「ま、いいんだけど。」

よくない、僕が非常によくない。でも今日遊園地に行くのはちょっとした……色々忙しいし。ということだ。

「飴、返して。」

「は?」

「いただきます。」

「え、あ、あー……!!!!!!」

僕はオレンジの飴玉を口に入れる。うん、おいし。さてと。怒っている彼女の唇に自分の唇を押し当てる。そして、彼女の舌の上に甘い飴玉を乗っけておしまい。

「今度、埋め合わせでデートするから、今回はこれで許してよ。」

顔を真っ赤にする彼女に微笑みかける。彼女曰く究極の微笑みで。

「あ、う、ん。」

「可愛いよ。僕だけの仄亞。永遠に僕だけのモノでいるんだよ? 他の男にそんな顔したらただじゃおかない。」

もし、そんなことがあれば、僕は彼女を部屋に縛り付けてしまいうだろう。それは、甘美な誘惑だけれど。きっと、それは禁じられた行為だから。そして何より僕の歯止めが利かなくなるから。だから。

「大人しく来年も僕の隣にいてよね。」

そうしてくれなくちゃ、きつと狂ってしまつから。

「うん。いるよ。絶対に。約束する。」

そうしてくれるとありがたい。僕も変なことで雪兄に怒られたくはないし。

「あまりにベタなことしてくれたから一瞬暁留じゃないかもしれないとか思っちゃったよ。よかった。紛れもなく暁留だ。」

「お褒め頂き光栄。」

「褒めてないし。」

願わくば、彼女が永遠に僕の隣にいてくれますように。こんな何でもない日々が永久に続いてくれますように。

「暁留？」

「ん、なんでもないよ。」

これは、誰かを失ったことのある人の願いだ。誰かが隣から消えてしまったものの切なる叫びだ。それなら君はこんな願いを知らなくていい。

たとえ死んだって僕は君をとらえて離さないから。

小話 ハロウィンという名の甘い時間（後書き）

いかがでしたでしょうか。え、最後の一文？ええ、甘いセリフではなく怖いセリフです。ちなみに暁留が失った人は両親、（一時的に）兄、《片翼》です。後半二人は帰ってきましたし、ましてや白雪は自分から離れて行ったわけではありませんが。

ヤンデレ度で行くと暁留が一位かなあ。二位は仄亞で、三位が白雪。ただしこいつは弟相手に病んでるだけで《片翼》にはそこまで病んでませんが。

だいたい、雨欺はみんなヤンデレですよ。仄亞はまだ雨欺ではありませんが。

思考が残念な兄弟という名の強い兄弟（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！そもそもここ数日パソコンにすら触れてませんでした……。

思考が残念な兄弟という名の強い兄弟

「んー結構幸せではあったかな。父親も母親も好きだったし。三歳の時に自分が本当の子どもじゃないって知ったんだけど、結構その時も平気だったしさ。暁留が産まれる時も逃げようとしたら捕まっでさ、強引に引きとめられて。兄弟に平等に愛を注いでくれた。産まれた弟は我儘で、甘えたで、どうしようもなくて。でも可愛かったし、慕ってくれた。うん。言うことなしじゃない？しかもその後はまあ色々あったけどさ、可愛い《片翼》に会えて、その上義妹までできそうなんだよ？僕はきつと今、雨欺一幸せだね。」

ああ、この人は、強い。そりゃあおじい様も歯がたたないよ。だってこんなにも強い。

「ちなみに余談じゃが、白雪と暁留の名を知らないものはモグリだと言われているのはその事件からじゃ。白雪は十歳にして異常なまでに恐ろしい能力があった。恐怖を司る雨欺が恐ろしいと感じるほどに恐ろしかった。綺麗だと感じてしまうほど、恐ろしかった。のくせに、まだ二歳だった暁留はそれを怖がらなかった。むしろ、陶醉していた。」

「だって、綺麗だったんだもん。学園長たちはさ、綺麗だと感じるほど恐ろしかったのかもしれないけど、僕からしてみれば恐ろしいと感じるくらい綺麗だったんだ。綺麗で、綺麗で、すごく、美しかったんだ。」

「他の子どもは皆泣きだしたというのに。それを見た大人は暁留も恐ろしく感じたんじゃない。だから、白雪と暁留を知らぬものはモグリなんじゃよ。」

ふうん。要するに……

「暁留は昔から歪んだものが好きだったと。」

「ああ、そういうことも。」

「違うよ！」

妙に雪さんは納得してますよ。暁留君。

「ちゃんと、桜も、雪も、紅葉も好きだよ！」

「暁留さあ、桜は人間の血を吸って咲くんだよって言ったら余計に好きになったよね。桜」

「だ、だって強かでしょ？」

「紅葉も血みたいに赤いつて話をしたら……」

「ごめんなさい。僕が悪かったです。」

あら、負けちゃった。

「僕に勝とうなんて思わないほうがいいね。こっちは色々知ってるんだから。」

確かにね、過去を知ってる人とはやりにくいよね。

「……だって恐怖と綺麗は紙一重なんだよ？」

「はいはい。」

「い、歪なものほど美しいんだよ？」

「はいはい。」

「ちゃんと聞いてよ。」

「そーだねー。」

もう完全に遊ばれてるよ。あれか、惚れた弱みとか言うやつか。いや、違う……よね？

「むー……」

「ああ、仄亞ちゃん、ごめんね？嫉妬？」

「そーだよ。どーせ嫉妬だよ。」

ブイツと顔を背ける。

「ま、四人で仲良くしてればいいーんじゃない？楽しさ。」

うつわー……雨欺でそんなこと言う人初めて見た。

「ってというか僕が弟離れできそうにない。後、暁留は僕が仕込んだから、多分兄離れできない。ごめんね？」

「謝られても困るというか。」

「んー……だよなー……僕さ、雨欺でも異端だったでしょ？だからかな。どうせ自分には《片翼》なんてできないと思っててね。それ

じゃあとりあえず弟といずれできるであろう義妹を籠絡しちやおう
と思つてた時期がありまして。ていうかまあ今もそんな感じではあ
るけどね。」

うわ、この人いろんな意味で最悪だわ。ていうか思考が残念すぎる
わ。

「まあそんな感じだから、許して？」

「もういい……諦める。うん。」

「そうしてくれると助かるね。」

微笑みながら私を背後から抱き締める雪さん……ってあれ？

思考が残念な兄弟という名の強い兄弟（後書き）

《片翼》 至上主義の雨欺の中では白雪のような人間は特殊です。かなり。そして彼は「特殊」で「異端」であるために、強い精神と肉体を持っています。また、自分がそのようなモノだったから同じような人の辛さも理解しているのでしょう。うん、いいお兄さんだ。そしてこいつをグレさせなかった両親たちはすごいと思う。まあ歪んでいるのは仕方ない。いくら「特殊」で「異端」でも雨欺ですからね。

迷惑行為という名の休憩時間

「えーっと……雪さん？」

「ん？」

いや、ん？じゃなくて。

「ええと、これは私どーすればよいのでしょうか。」

「大人しく抱かれとけばいいんじゃないかな？」

なんだその俺様が吐くようなセリフは。

「嫉妬させちゃったお詫び。」

「いや、もうそれお詫びにすらなってるじゃないし。むしろ迷惑行為に近いよ？」

「んー……もうちょい体重を預けてくれると多分お詫びになると思うよ？」

何この意味不明な物体は。言ってることの意味が分からないよ。

「畏とか仕掛けてたりしないよね？」

「信用ないなあ僕。大丈夫だよ。んなことしたら暁留に殺される。」

いや、今の時点でだいぶ殺気が見え隠れしてますよ？赤い瞳を持つ男のほうから。

「いいんだよ。あいつが一番怒る時は仄亞ちゃんを誰かが傷つけた時なんだから。」

自分は傷つけるくせに。ああ、そうか。独占欲か。自分以外が傷つけることは決して許さない。いや、もうちょっと逆ベクトルに働いてほしかったかも。その独占欲。

「じゃあお言葉に甘えて。」

疲れてたんだよね。立ってることに。ということでは体重を預けてみた。

「重くない？」

「いや、これで重かったら問題でしょ。大丈夫。」
「じゃあいつか。」

「疲れてたんでしょ？」

「そりゃあね。」

飛行機でここまで来て。久々に暁留にあって、首絞められかけたりとかして。そりゃあ疲れもすると思う。

「疲れたんなら休めばいいんだよ。」

「いや、そういうわけにもいかないし。」

雪さんの腕の中めちやくちや居心地いいけどね。

「お詫びになる？」

「なるねー……」

温かくて、優しくて、ああ、この感覚は久々に味わったかな。

「雪さんが年下に好かれる理由がよく分かったかも。」

「そう？」

「ん、多分ね、安心できるからじゃないかな？」

幼子が母親に抱く安心感のような感覚。愛されている感覚。一度味わえば決して逃れられないであろう優しくて温かいソレ。

「僕はそこまでのいい人間じゃないんだけどね。」

「多分そういうフェロモンの何かが醸し出されているんじゃないかな……」

「あまり嬉しくないね。仄亞ちゃんや暁留に好かれるのはいいけど別の鬱陶しい奴までかわってくるのはヤダ。」

「やっぱりこの人なんか変だ……それと、この人……」

「雪さんって私に似てるよね。」

「ああ、うん。それは僕もそう思う。」

「やっぱり。」

「つーかそっくりだろ。お前らさ。違うのは性別と年齢と《片翼》くらいだろ。」

「笙さんもそう思うかー……」

迷惑行為という名の休憩時間（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！気分はコタツでぬくぬくできた時の気分です。これからもよろしく願います>（――）
<あと皆様、寒くなってきましたので風邪にはお気をつけください
……ごほ、げほっ、ずるずる、はつくしょん……ナニカ？ええ、軽い風邪にかかってますが熱はないので大丈夫です。多分。

白雪は年下に好かれるというより異端に好かれます。たまたま異端に年下が多いだけです。後は恐らく姿かたちの問題でしょう。女を含めても雨欺一綺麗です。綺麗な薔薇には棘がある。これ、名言。ついでに棘には毒が仕込まれていたりする。

義妹という名の面倒な子（前書き）

短めな気が。

義妹という名の面倒な子

「だから言っただじゃん。面倒なのを《片翼》にしたなって。深桜のこともそうだけど、仄亞ちゃん本人も面倒だなーって。」

「んなこと思ってたんだ？」

「怒らないでよ。褒めてはないけど貶してもないんだからさ。」

「いや、別に怒ったりはしていないんだけどね？」

「まあ多少面倒なくらいがちょうどいいんじゃないの？ 暁留の《片翼》なんざまともな人が出来るわけないし。」

「ああ、それは確かに。」

私ですらたまに放棄したくなることあるし。

「んー……」

「何かご不満？」

暁留が一人唸っていた。

「いや、似てる？」

「え？……ああ、僕と仄亞ちゃんがってこと？ 相変わらず主語がないことが多いね。古文じゃあるまいし主語の省略はやめようよ。」

「しかも似てるじゃん。思いつきり似てるじゃん。暁留、気づいてなかったの？」

「いや、ぜんっぜん気づかなかった。どこが似てるの？」

馬鹿だ。こいつ心底馬鹿だ。

「んーまず好き嫌いがはつきりしてるでしょ。」

とりあえず、片っぱしから上げていくことにする。。

「嫌いなものには容赦ないだろ。」

「好きなものは好きだし？」

「面倒事、すなわちお前の世話を引きつけてるし？」

「誰かさんのストレス解消につきあってあげるし。」

「誰かさんの我儘につきあってあげるし。」

「あ、あと怒ると怖い。ま、主に怒らせてるのは一人だけだけど。」

「そうそう。後はそうだな。我儘な誰かさんを甘やかしてやるし。」

「甘えたがりな誰かさんを無下にしないし。」

「本心は隠すし。」

「そのタイミングでそれ言っちゃだめだよ。雪さん。」

「あ、それもそうだね。一人かわいいそうなのが出てきちゃうもんね。」

「そう言つて、可愛いそうな約一名を見ると……珍しいことにへこんでた。」

「二人とも僕のことめーわくなんだね……気づかなくてごめんなさい。」

さて、これをどうしたものか。

「あ、そういえばまだ共通点あるね。一番大切なさ。」

「まだ、あるの……」

「あ、そうだね。あるね。」

どうも本当に私と雪さんは似ているらしかった。うん、まだまだ共通点は山ほどあるけどその中でも一番大切なものがあるね。

「聞きたい？」

「もう、いいから。言っなら早く。」

義妹という名の面倒な子（後書き）

喘息でした。数年何もなかったから大丈夫だと思っていたのに奴らは現れました。

皆様もお体にお気を付けくださいませ。

さて、それは置いておいて。

白雪と仄亜は似ています。それもかなり。考え方や趣味嗜好などが特に似ています。偶然でしょう。恐らく。これを考えると晝留はただのブラコンな気がしますがそこには気付かなかったふりです。

歪んだ弟という名の純粹な弟（前書き）

短めです。

歪んだ弟という名の純粹な弟

「変に打たれ弱い誰かさんを結局愛しちゃったりしてるとことか？」

「うえ？」

まさか一言一句違わないとは。恐るべし。

「変な顔。なんか反応すれば？前言撤回してほしいの？」

「違う！」

そう言つて、顔を真っ赤にさせる暁留。うん、さっきの仕返しでもするか。

「目より真っ赤。そんなに嬉しかったの？」

「あーあー……お前変なところが純粹だから。こういうのに弱いんだよね。」

「そんなに嬉しかったんならいくらでも言つてあげるのに。ねえ、雪さん？」

「本当だよ。減るもんじゃなし。」

「愛してるよ？」

耳元で囁いてやると、また真っ赤になった。何これ、中毒になりそうなくらい楽しいわ。

「言つものには慣れてるのにね。」

「ほんと、可愛いね。」

「も、やめて。」

弱弱しい懇願。普段からじゃ想像つかないね。

「本当はやめてほしくなんてないくせに。」

「そうそう、そんな本気でない我儘は聞いてなんかあげないんだから。」

「ちゃんとねだれたら言つてあげんこともないけど。」

「どうする？」

あ、周囲に助けを求め始めた。うん、みんな目をそらしまくってる

けどね。

「ほらほら、逃げるなって昔教えただろ？」

「そうだよ曉留。ちゃんと言わないと。」

「二人の馬鹿……」

「そんな態度とっていいの？」

「そうだよ？嫌いになっちゃうかもよ。」

「それは駄目！」

扱いやすいなあ。よほどパニックになってるんだね。

「嫌いになれたくはないんだね……本当、僕の弟とは思えない可愛さ。」

「うう……弟だもん……一応。」

あー……どうしよう。なんか変な扉開きそうだわ私。今まで開いた扉と逆方向の扉開きそうだわ。そんな時、ドアがノックされる。

歪んだ弟という名の純粹な弟（後書き）

暁留はやっぱり白雪に弱いですね。ブラコンだから。兄に関して言えばもう弟溺愛してますしね。この兄弟。

長かった平和期間という名の避けたかった悪魔の帰還（前書き）

更新が遅れてすみません。登場人物が増えるの巻です。

長かった平和期間という名の避けたかった悪魔の帰還

「どうぞ。」

「……失礼します。」

来たのは二組の男女。一人を除き皆知り合いだ。

「碧兄、葉兄、詩織姉！誰でもいいから助けて！現在 help me 状況！」

おお、発音完璧だ。さすがだね。

「えーっと……どうなってるんだ？」

「というか、白雪？」

「え？雪くん？あ、本当だ！おかえり！」

「ん、ただいま。っとその二人、なんだって外に出ようとしてる。」

雪さんを見たときに逃げる男二人、プラス何が何だか分かっていない様子の女性。

「えーっと、いいんですか？葉月さん。」

「いいんです。むしろあいつとかかわると面倒なことになりますから。」

「どういうこと、それ。まるで僕がトラブルメーカーみたいに言わないでほしいね。」

「そういう意味じゃなくて、お前にかかわって気に入られたり、嫌われたりしたら面倒って意味だろ。ほら、ホノとかその典型。」

「うわー……最悪だ。私、男運ないのかなあ………なさそうだなあ。」

「ていうかここに僕の味方は……？」

「ごめんよ晁留。現在お前の味方になろうなんていう勇者は誰一人としていない。」

「碧兄、雪兄より年上だね？雨欺の現表当主だね？」

「そうだけど、ほら、白雪を敵に回せるほど強くないんだ。息子には平穩無事な生活を送ってほしいし。」

雨欺碧露さん。雨欺の現表当主。年は二十六歳。三歳になる息子が一人いる。

「ねえ葉兄、スクールカウンセラーだったよね？カウンセリングをお願いしたいんだけど。」

「今は休憩中なんだ。仕事はしないって決めている。」

雨欺葉月さん。ここのスクールカウンセラー。年は二十四歳。未だ《片翼》なし。

「泣いていい……？」

「ホノと白雪の胸でも貸してもらったらどうだ？」

「いいなーそれ。おいでよ暁留。慰めてあげる。」

「そうそう。おいで、暁留。んでもっていい声で鳴いてね……っと間違えた。泣いてね？」

「遠慮させてください。いや、本気で。」

そんなに拒絶されるとショックだわ。いやいや、きつと雪さんに言っただよ。そうに違いない……と思わせてください。

「まあそのことは一旦置いておいて。久しぶりだね。ヘキもヨウも。」

「あんまり会いたくなかったんだけどな。こちらとしては。」

「まったくもって碧露さんの言うとおり。」

「ひどいな。弟のためを思って急いで帰ってきた僕に少しは何か思わないわけ？」

「ん？思うな。《片翼》のためじゃなく、弟のために帰ってきたお前はやっぱりブラコンだったんだなと。」

ああ、否定できないよ。碧露さん。というかむしろ肯定しまくりだよ。

「ブラコンなのは認めるよ。事実だし。自分でもたまに病んでるな！って思うことあるし。」

「雪白、今でも遅くない。とつとこいつのもとを離れるのが一番だ。」

「いえ、私はそんな白雪さんも大好きですから。」

健気だ……いい子だ……

「僕も雪白を世界で一番愛してるよ？」

「二番目との差がほぼゼロだろうが。」

「んー……ま、昔色々あったからね……約束のこともあるしさ。」

約束？なんだそれ。私聞いてないよ。

長かった平和期間という名の避けたかった悪魔の帰還（後書き）

はい、ヘキロ、ヨウヅキ、シオリと読みます。登場回数は少ないかと。

雪白には病んでなくせに弟には病んでる白雪は大丈夫なのでしょうか。この頃心配になってきました、作者なのに。

馬鹿な子という名の社会に適應できない子（前書き）

有言実行。よかった。

馬鹿な子という名の社会に適應できない子

「義務で一緒にいるんだつたら雪兄はいらない。好きにすれば。」

「誰がそんなこと言ったよ。言われなくとも僕は自分の好きに生きるし自分の好きな人の傍にいる。約束なんて知ったことか。いくら僕がファザコンだったとしても自由に生きることだけは譲らないよ。」

「なんか約束なんてしてたかのう……」

「というか頼まれごとかな。父さんが暁留のこと見捨ててなつて。傍にいてやれつて。ま、破りたくなつたらいつだつて破つてやる気満々だけど。あの人ほんつとに息子大好きだよな。」

あれだね、馬鹿な子ほどかわいいとかいうやつだね。きっと。この場合馬鹿というより社会に適應できないのほうが正しいけど。

「そんな約束に縛られるほど僕は素直じゃないんでね。」

「まあそれならいいけど。」

「とかいいながらもものすごい捨てられたらどうしようって思ってたんだよね、可愛い暁留君は。」

あ、また顔赤くなった。

「んな顔するくらいなら最初からそんなばかばかしいこと言わなきゃいいのに。」

「だつて義務で付き合われるのやだしさ。」

「大丈夫だつて。一人しかいない身内を見捨てたりなんてしないし。というか捨てると言われても捨てないから。可愛い弟だしね。」

なんで雪白はこんなブラコンと一緒にいるんだろ……謎だ。

「で、そっちの女の子はどちら様？」

葉月さんが庇うように女性を背後へやる。

「え？ああ……白雪には関係ない人ですから。」

「ヨウの《片翼》？」

「んなわけあるかよ。ヨウの《片翼》候補。現在進行形で片思いな

の。ingなの。」

「笙月！」

あれま、珍しいこともあるもんだ。雨欺が片思いだなんて。

「ふうん。ずいぶん遅かったね。出逢うの。ま、知り合いに四十過ぎでも《片翼》なしを知ってるけどさ。」

「珍しいな。」

「僕に片思いしてるんだよ。」

「……かわいそうに。」

碧露さん、大人の哀愁漂わせながらそんなこと言わないでください。

「というか片思いしかしたことがないかわいそうな大人なんだよ。」
「かわいそうすぎる！」

「うん、お前そいつにつき合ってやれ。それがせめてもの償いだ。
色々な奴に対する。」

「ん……ま、遊びでならね、多少付き合ってあげんこともないけど。そう言う感じの相手じゃないんだよね。ほら、年の離れた兄みたいな感じだからさ。」

遊び……雪さん、ひどい人……というかその人本当にかわいそう……

「惚れた相手を間違えたな……」

「うん、本当にそう思うよ……」

雪さん以外の誰もがその名前も顔も知らない誰かさんに同情していた。

「大体あの人はね、この世で一番好きとか言っておきながらキス一つできない腑抜けヤローだからね。いいんだよ。これで。」

「いいんですか？それ。」

「うーん……じゃあ次の僕のセリフで全員がいいって言うほうに一万円賭けるよ。未成年者以外は賭けてみたら？」

全員が？うーん……雪さんのことだからあり得そうだ。

「俺は全員つてのはありえねえと思うね。全員が全員いいとは言わないに千円。だいたい俺がいつて言わなきゃいい話だろ？それって。」

「でも白雪の言うことだしな、私は全員がいいというふうに一万円。

」

「僕は笙月に乗っかって千円。」

「わしは不参加。」

「あ、私たちも遠慮するわ。男だけでどうぞ。」

白雪さんが笑みを浮かべ、口を開く。

「僕の兄みたいな人でね、僕よりひどい変態なんだ。んでもって僕がこうなっちゃった原因。」

「白雪、まったくもって問題ない。今すぐ振れ。思う存分振ってこい。」

というのは笙月さんの言葉だけど、皆様似たようなことを間髪いれずにおっしゃいました。

馬鹿な子という名の社会に適應できない子（後書き）

雪さんはブラコンでファザコンだったようです。あと彼に片思いした可哀想な男は出てきます。また変なキャラが増えてしまった……

諸悪の根源という名の報われない大人

「ほら、そう言った。ヘキとで千円ずつ分けようか。」

「ああ。」

「いや、だつてそう言うだろ。」

「まあ僕もそう言っただろうね。だつて諸悪の根源でしょ？」

諸悪の根源って……飯にもあんたの兄の兄（みたいな人）だろうに。

「ていうかご本人、登場？」

「え？」

ドアの傍に美青年。髪はかなり茶色に近い。目は髪と同じ色。胸元ははだけてるし金のチェーンネックレスつけてるしでいわゆるチャラい感じ。

「よう、白雪。つーかなニコレ。なんで俺こんなに注目浴びちゃってるんですかね。」

いや、まあ今までの会話が会話だったからって言うのもあるけど……それ以前に。

「叶多さん、なんでカナちゃんと冠薙持ってたの？」

「え？ああ、さっき廊下で拾った。なんか、不審者だったらあれだなと思つて。」

両手に成年男子及び女子高生持つてたらそりゃあ誰だつて注目するだろ。

「そつち、左手に持つてるほうは僕の友人。で、右手に持つてるのは知り合い。だから離していいよ。」

「あつそ。お前ら悪かったな。」

「「いえ、まあいいんですけど。」」

そういうしかないか。

「……誰だ？こいつ。」

「私も知らないんですが。」

「私も知らない。誰だこいつ？」

あれ？前及び現表当主とその秘書的立ち位置の雪白までもが知らないってこの人何者だ？

「暁留知ってる？」

「知らない。」

「うえええ……誰？本当。」

「んーま、隠してたしなあ。」

「雨欺叶多。僕と暁留の父親の幼馴染……というかなんというか。」

「年は四十七になった。色は薄い水色っつーかなんっつーか。あれだ、水平線の色。遥か彼方も見ることでできそうな色だからカナタ。多くを叶えると書く。」

「の割に願いがほぼ叶わないと。」

「白雪がちよつとでも俺の物にでもなりや願いの一つが叶うんだが、どうよ、俺とイイコトしない？」

ああ、このテンションは紛れもなく雪さん。

「叶多さんが僕をこの世もあの世も含めて世界で一番好きって言っなら考えてあげてもいいよ？」

「そりゃダメだ。っーか知ってて言ってるんだろ。一体いつからそんな子に育ったんだか。」

「さあね。まあそれくらい言えるようになったら遊んでもいいよ？」
無表情で淡々と言う白雪さんに叶多さんは悲しそうな瞳で笑う。

「じゃ、一生かかったって俺はお前と遊べないわけだ。」

「そう言うことになるね。ま、傍にいらいるくらいならいいけど？」

「いつからそんな子になったんだ。本当。」

「叶多さんに会ってから。」

「はっ、生意気な奴。」

笑いながら叶多さんはこちらを向く。

「ふーん……お前が暁留？」

諸悪の根源という名の報われない大人（後書き）

雨欺叶多……諸悪の根源です。あと報われない人。一途っちゃあ一途ですね。隠してた理由はまあおいおい。

次の更新は恐らくクリスマススイブかクリスマスです。小話を書きま
す。

小話 クリスマスイブという名の日常（前書き）

クリスマス小話です。そしてPV30000アクセス記念小話です。これも皆様のおかげです。まさかこんなにアクセスが来るとは作者も思いませんでした。これからもよろしくやってくださいね。

さて、今回の話は本編より一年ほど前のお話です。暗いです。長いです。暁留が怖いです。それでもよい方はどうぞ。

小話 クリスマスイブという名の日常

クリスマス。赤や緑、その他色とりどりの眩い光で彩られている街。そんな街を歩いていても、全く心は晴れない。むしろ幸せそうな人々にいらいらする。僕はちつとも幸せなんかじゃないのに。きゃいきゃい騒ぐ女の子たち。鬱陶しいことこの上ない。彼女も今、こんな風に誰かとはしゃいでいるのだろうか。

「……考えただけで虫唾が走る。」

気持ち悪い。ああ、やっぱり彼女を監禁しておけばよかった。そうすればこんな辛い思いしなくてよかったのに。

「あのお、すみませえん。ひとりですかあ？」

「死ね。」

「え？」

「邪魔。鬱陶しい。目障り。失せろ。」

彼女じゃないものに用はない。邪魔なだけ。

「何あれ、感じ悪。」

別にどう思われたって一緒だし。むしろこんな馬鹿に好かれたほうが気持ち悪いっての。そうこうしているうちにようやく家についた。

「お、暁留。遅いぞ。」

「桐生？」

なんで桐生が道にいるんだ？こんな寒いのに。

「ったく……夕飯。」

「ああ、いらない。」

どうでもいいし。

「と言われてもな、母さんがゆるさねーよそんなの。」

夕飯を食べると、咲良さんに怒られるのを天秤にかけると、天秤はあっさりと傾いた。

「じゃあおじやまします。」

「お帰りなさい。今日はチキンよチキン。豪華でしょ？」

「うん。すつごく豪華だね。」

適当にあしらう。

「もう。少しはちゃんと反応しなさいよ……そういや暁留君、なんか小包届いてたわよ?」

「どーでもいいです。」

「仄亞からだけど。」

仄亞から?

「……どーでもよくありません。」

「でしょ?」

全くどうでもよくない。

「手洗いうがいでしてからね。」

急いでそれでいて丁寧に手を洗い、うがいをする。

「はい。」

恐る恐る段ボールを開ける。中には封筒とブランケット?

「なんでブランケット?」

いや、趣味はいいんだけど。

「あら、いいじゃない。暁留君によく似合うわよ。」

「そうですね。」

確かに似合うとは思っけど。

「俺にはプレゼントなんて贈らないくせに……まあいいか。封筒開けるよ。」

「うん。」

封筒も恐る恐るあける。中には便箋。何が書かれてあるんだろう。

「なんて?」

「簡単に言っと、身体を気をつけてねってことかな。」

「……そうか。」

「ちなみに桐生に関するものは何一つ書かれていない。」

「………そうか」

あ、桐生泣きそうだ。シスコンめ。でも事実桐生に関しては何一つ

書かれてないんだよな。

向こうでご飯をご馳走になり、家へ帰る。お風呂に入って、もう一度手紙を見る。

『安心してね。クリスマスもお正月も叔父さんたちとしか出かけないから。後何でもかんでもどうでもいいで済まさないようにね。身体壊しちゃうよ?』

「見通されてるし。」

本当に、なんでこんなに愛おしいんだろうか。

クリスマスには奇跡が起こると言う。別に枕元にプレゼントなんて欲しくない。そのかわり、夢の中だけでもいい。彼女と会わせて下さい。そのあとどれほど辛くなってもいいから……………

生憎、夢は見なかった。いつも通り、血まみれのベッド。首元にはいつも通りかきむしったような跡。いつも通りでないこととして枕元にはプレゼント。そして……

『おっはよ。』

携帯電話が鳴った。

「仄亞…………?」

『うん。そうだよ?』

なんで。

『プレゼントありがとう。』

「…………こちらこそ。」

『寂しがりな晁留くんのためにモーニングコールですよ。えへへ。』
照れたような声。ああ、もう。

『晁留?』

「仄亞。」

『なに？』

「愛してるよ？」

どうしようもないくらいに。

『私も愛してるよ。』

僕らが二人きりでクリスマスを過ごせるまで後何年かかるだろうか。きっと何年かかっても僕は待てるだろう。誰よりも愛しい彼女のためならば。

小話 クリスマスイブという名の日常（後書き）

さて、このまま終わってしまうとあまりに晧留君が可哀想過ぎるので、できれば明日埋め合わせたいです。安心してくださいね。次は確実にただのバカップルで終わります。（安心できるのかそれ？というツッコミは受け付けませんよ？）

小話 クリスマスという名のバカカップルのための日（前書き）

前よりは短めです。ただただバカップル。

小話 クリスマスという名のバカカップルのための日

「あ、雪だぁ……」

「あー……どおりで寒いと思った。」

「夢のないこと言わないでよ。ホワイトクリスマスですよ暁留くん。」

「んー……寒い。仄亞もつとこっち。」

現在私たちはベッドの中だったりする。っていつても何かいかがわしいことをしていたわけではない。単純に添い寝してるだけ。

「僕より窓のほうがいいの……？」

「あーもう……はいはい。これでいいんですよ。」

身体を反転。暁留の傍に寄る。

「ん。これでいいの。」

抱きしめられる。なんだろう、大型犬にしか見えないよ。

「んん……手はこっち。」

はいはい、抱きしめればいいんだね。

「あつたかくて気持ちいい……なんで？」

「さぁ……」

なんでと言われても。

「暁留、そろそろ起きないと。お腹すくよ？」

「いい。」

……我儘野郎め。

「そう言わないの。ほら、起きなつて。」

「や。」

「じゃあご飯できたら呼ぶね。」

ここから出ようとすると不満そうにしながらも解放された。

「暁留はそこで待ってなよ。ちゃんとストーブつけて、部屋あっためて、ついでにブランケットも温めとくから。人肌で。」

「やだ。一人のベッドは寂しいもん。」

本音が駄々漏れだな。寒くて寝起きでなおかつここに私しかないからか。ほんっと、分かりやすい。これじゃあどっちが年上か分かんないよ。

「寒い……」

「そうだね。寒いね。」

まあこう言ってられるうちはいい。本当に辛い時なら寒さも分らないのだから。

顔を洗って（もちろん誰かさんのためにお湯。）髪をくくる。で、我儘野郎の世話。

「椅子も冷たい。」

「座ってたら温くなるよ。」

トースターに食パンを入れて、冷蔵庫から卵とハムを取り出して、フライパンで焼いて……お湯沸かして紅茶を二杯。トーストとハムエッグと紅茶。これでいいか。

「はい。」

「ん……いただきます。」

「美味しい？」

「美味しい。」

それはよかった。

「はい、ブランケット。」

「あったかい。」

そりゃああんたのためにぬくくしたからな。

「どっか出かける？」

「出かける。」

珍しいなあ、寒いのに。

「じゃあ一緒に出かけようか。」

「うん。ねえ仄亞。」

「なに？」

「愛してるよ。」

「私も愛してるよ。」

「やっぱり地声のほうがいいね。」

「そっぴや一年前は電話だったっけ。」

「ね、曉留。」

「なに？」

「出かけるときさ、手つないでいい？」

「いいけど……珍しいね。仄亞がそんなこと言うの。」

「うん、なんかね。」

嬉しくなったから。

今日は手袋を片方忘れていこう。そうすればコートの中で指を絡めることができるから。

小話 クリスマスという名のバカカップルのための日（後書き）

ただのバカカップルです。本当。ムカついてきました。なんか。（彼氏？何それおいしいの？）

小話 お正月という名の挨拶まわり（前書き）

新年あけましておめでとございます。拙い物語ですが本年もよろしく願います。――

白雪視点です。長め。

小話 お正月という名の挨拶まわり

「おはよう。」

「……ん、おはよ。仄亞、朝だよ。」

僕が暁留の部屋に（無断で）入った時、最愛の弟は眠っていた。彼女とともに。

「新年早々何やってるんだよ。」

「あ、おはよ……雪さん？なんでいるの？」

「お年玉を与えにだよ。」

二人にお年玉をあげる。まあ社会人だからね。

「ありがとうございます。」

「ありがとう、雪兄。」

「うん、で？新年早々何やってるのかな？」

「えへへ。」

笑ってすますってよくないと思うんだよね。

「新年早々遊んでました。」

「……」

……開き直るのもよくないと思うんだよね。

「おかげで寝不足なんだよ……まあいいんだけどね。」

「暁留……お前ってやつは……」

「いいでしょ。ああ、羨ましいの？」

普段の三割増し艶っぽい笑顔で言われてもね……弟の可愛さを実感するだけだよ。

「誰が羨ましいかっての。まったく……二人ともその顔で咲良さんたちのところ行くなよ。何してたかばればれだから。」

「お母さんなら許してくれそうだけどね。」

「うるさいのがいるからなあ……数人さんって帰ってるの？」

「うーん……昨日の夜中に帰ってきてると思う。帰ってこなきゃよかったのに。」

仄亞ちゃんは父親が嫌いらしい。というか……

「あのさ、今の状況を数人さんが見たら……」

「ああ……大丈夫。多分お母さんが言いくるめるから。」
恐るべき咲良さん。

「さてと、着替えようか。うるさいのは瀬戸に預けよう。」

「実希とは一緒に初詣行くんだよね。それまでにお兄ちゃんの怒りが収まってるといいけど。」

そう言いながら着替えを始める二人。さて、僕はどうすればいいんだろう？

「雪兄は先に行つて。」

そーですか、彼女の身体は見せたくないですか。

「はいはい。初詣の後は分かっているとと思うけど面倒なご挨拶ね。」
「分かてるよ。」

雨欺本家へのご挨拶だ。面倒だなあ。ここ数年はアメリカだったから行つてなかったんだよね。

大人の面倒な挨拶が終わった直後に二人がやってきた。

「あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく。」

ああ、言つてなかったな。

「うん。あけましておめでとう。今年もよろしく。あと、これをヨロシク。」

これ〓晧留。

「雪兄？」

「だつてお前仄亞ちゃんに見捨てられたら終わるし。」

「で？お前ら新年早々何をやってたんだ？」

ああ、桐生君が怒ってるよ。

「何だろうね。」

「お前！」

「まあまあいいじゃないの。ほら、二人ともお年玉。」

「あ、ありがとうございます。」

「ありがとう。」

数人さんは、咲良さんに言いくるめられたようで、何も言わなかった。

「仄亞、お年玉だ。」

「ああ、ありがとう。」

「うわー……笑顔がないよ。」

「暁留君も。」

「ありがとうございます。」

「うわー笑顔だよ。胡散臭い笑顔だよ。」

「二人とも貯金はちゃんとしておくんだよ？」

「どうせ、雨欺の方から山のように来るんだし。」

「大丈夫。分かってるよ。」

「まあ今のところ欲しいものないし。ああ、雪兄、五円ちょうだい。」

仄亞が小銭ないんだって。」

ああ、お賽銭ね。」

「はいはい。初詣行つてからね。」

その時、ばたんとドアの開く音がする。真っ白な少女が現れる。

「遅れてすみません！」

愛しい彼女。彼女にも言っておかなければ。

「雪白。」

「なんですか？」

「あけましておめでとう。今年もよろしく。」

「こちらこそ、今年もよろしくお願いします。」

愛しい彼女は笑顔で答えた。

小話 お正月という名の挨拶まわり（後書き）

暁留と仄亞が何をやっていたかはご想像にお任せします……新年早々すみません。（苦笑）

反面教師という名の誘惑に負けた大人（前書き）

更新が遅れてすみません。小話三つで疲れた……体力ないとか言わないでください。

お気に入り登録ありがとうございます。気分ほつくほくですよ。焼き芋な感じにほつくほくですよ。これからもよろしくお願いします

> (— —) <

反面教師という名の誘惑に負けた大人

品定めするような目。

「はあ……どうも、はじめまして。」

「へえ、ふーん……白雪のお気に入りだと思つとズタズタにしたいくなるね。」

「んなことしたら叶多さんが死ぬよ？ああ、死にたいんだっけ？」

「誰がだよ。あー腹立つ。俺のがよっぽど長く白雪というつてのにさ。俺には手え出さずに弟に出すとかさ。何だよ、お前あれか？年下好きか？」

「んー……ま、好みではあるね。好き勝手できるじゃん？」

「うわ、そんな理由で年下ばかり好んでんのかこの人。」

「……鬼畜め。」

「齡九歳の少年に手え出そうとした人に言われたかないねえ。」
「なんだって？」

「最低だ……」

全員が白い目で叶多さんを見る。

「いやあ、俺もな？最低だと思うよ？でもな？無防備に寝てる白雪に触れない野郎はおかしい。んでもって触れたあと暴走しない野郎はもつとおかしい。」

「あー……叶多さん……分かります。その気持ち。」

「奏芽さん？何言ってるんですかあなた。」

「だろ？」

「カナちゃん！？」

「いや、だつて白雪の寝顔は反則ですよ？ただでさえ綺麗なのにあんな無防備に寝顔なんか晒されたら……男に痴漢する男の気持ちが分かってしまいますよ？」

「だよな。」

「うんうんと頷く叶多さん。いやまあ雪さんが綺麗なのは認めるけど

さ……

「お前口開かなきゃどこまでも綺麗だしよ。」

「しかも白雪の寝顔は微妙に幼いから余計に背徳心とかそういうのが押し寄せてきてですね……それがスパイスになって、こう、なんというか襲いたくなるというか。」

「ま、俺こいつが少年の時に襲ったけどね。」

「前科数え切れないほどあるもんね。」

うわ、最低だ。悪い大人の見本だ。雪さんがおかしくなるのも当たり前だ。

「しかもいい身体してるしな。お前。」

「ああ、白雪と海に行ったときに心底それ思いましたよ。服って装飾するためにあるんじゃないかって美しさを妨げるためにあるんだなと感じました。」

「ま、こいつの場合はな。」

ふーん、そんなに綺麗なのか。

「暁留より綺麗なの？」

「……うん、そうだね。」

あ、暁留がまたへこんでるよ。そうなんだ。暁留より綺麗なんだ。

「……なんで仄ちゃん暁留の身体が綺麗だって知ってるの？」

「ノーコメントで。」

いや、まあ一緒にお風呂入ったりしたことがあるからだけどね？

「とにかくこいつの身体は国宝級。」

ふうん。まあ色白いし恐らく程よく筋肉もついてるんだろうし鎖骨の辺りは艶っぽいし……確かに綺麗そうだ。

「雪兄が僕と同じ年の時とか思い出したくない……」

「なんで知ってるの？」

雪さんが十六の時ってことは暁留が八歳の時ってことだよな？

反面教師という名の誘惑に負けた大人（後書き）

またもや喘息気味ですが何か。ははは。ああ、また薬貰いに行かないきゃ。

叶多↓白雪↓暁留↓……？　？に誰も入らないことを願っています。

寂しがり屋という名の自分のためなら何だってやる男（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。これからもしょしくお願いします>（――）<

兄弟って普通ここまで仲良くないと思うんですよねー……

寂しがり屋という名の自分のためなら何だってやる男

「え？ああ……だって一緒にお風呂入ってたし。」

……あれ？おつかしいな、計算間違えたかな？ええっと、雪さんが十六歳の時だよな。

「仄ちゃん、計算は間違えてないからね？」

「……だよな。」

普通八歳にもなつて兄とお風呂に入るか？

「なんていうか一人で入るって言う時期を見失つてさ。」

「というか僕が言わせなかったんだよ。おかげでアメリカじゃ一人でお風呂入るのが寂しくて寂しくて。」

「だから一緒に入ろうとか言ってきたんですね？」

「誘ったのにカナちゃんのつてくれなかったしさ。」

「で、僕に電話してきたんだね……」

「うん。」

雪さんは思いのほか寂しがり屋だった！ウサギさんだった！

「似合いそうだなあ、ウサギコスプレ。」

「仄ちゃん？なんか目が怖いよ？」

「気のせい。」

雪さんちよつとだけ幼い顔立ちだしなあ。可愛いだろうなあ……そうだよ、雪さんばかり暁留と遊んでずるいし、その恨みも含めてコスプレしてもらおう。

「ね、雪さん。ウサギのコスプレしない？ていうかしろ。」

「はい？」

「いやあ、雪さんばかり暁留と遊んでずるいし。うん、ずるいよね。すごいずるいよね。だって暁留は私のモノなんだよ？これってあれだよな？いわゆる泥棒だよな。窃盗罪で逮捕だよな。」

ずるい。ずるいずるいずるい。暁留は私のモノなのに。

「……仄ちゃん？」

「うん、雪さんの処罰は後にする。」

「え？つていうか結局処罰されるの僕。」

「の前に暁留を……」

「いや、待つて。僕何もしてないよ？つていうかもしかなくてもスイッチ入ったね？完全にオンになってるよね。」

スイッチオン上等。どうせ身内しかないしここ。私は無理やり暁留を押し倒す。したたかに頭を打つ音がした。まあここ絨毯が敷かれてるからそこまでの打撃はないはずだし、ましてや《雨欺》がこの程度で死ぬわけないんだけど。

「んで？何すんの？」

「うーん……とりあえずブレザーを脱がそうかと。」

「まあそれくらいなら身内しかないからいいか。僕が暴走しなけりや大したことにはならないんだし。」

そうそう、おとなしくしてればいいんだよ。

「暁留が雪さんといちゃついているからいけないんだよ？」

「あーはいはいそーですねー。」

むう。相手にされてないし。

「大体仕方ないと思うんだよね、兄弟だしさ。」

「普通の兄弟はそんなに仲良くないもん。」

事実私とお兄ちゃんでもそこまで仲は良くない。というか一度も一緒に風呂入ったことないな。うん。お隣のお兄ちゃんとはあるけど……それはあれだね。最終的に恋人同士になったんだからいいよね。

「そうなの？」

「そうなんだろうね。普通は。」

「……分かってるなら雪兄も教えてよ。」

「僕が自分のためならなんだってすること知ってるだろ？」

「……そーだね。」

あ、諦めた。

寂しがり屋という名の自分のためなら何だってやる男（後書き）

仄亞さん、スイッチが入っちゃった編。この子はある意味誰よりも怖いかもしれません。

ちなみに、彼女は暁留と恋人同士になる前から一緒にお風呂入ってました。暁留、お前はよく耐えたよ。うん。

いい子という名の何でも聞く子（前書き）

ちょっと長めですかね？ 仄亞、スイッチ入っちゃった編。

いい子という名の何でも聞く子

「また入ろうね？」

「……はい。」

「むー……私は？」

「仄亞はいつでもオツケーだよ？」

「じゃあいい。」

ところで、ブレザーってどこにやればいいんだろう。どっかにほっぽったら皺になっちゃうしなあ。椅子まで歩いて掛けるか。

「ごくろうさま。」

「起きあがっちゃダメ。」

「僕が言われたことを聞くようない子だと思ってる？」

思ってないけど少しくらいおとなしくしてくれてもよかったと思う。

「っていうか寒いんだけど。」

「ここ暖房きいてるよ？」

まあエコのためにそこまで設定温度は高くはないと思うけど。

「ネクタイも取るのー。」

しゅるりと音をたててネクタイを外す。

「はいはい。」

「えへへ。」

そのまま抱きつく。

「こうすればあったかいでしょ？」

「あーうん。両方体温低いから何とも言えないけどね。」

「あったかくないの？」

「アッタカイデス。」

棒読みだけどもあいつか。

「ねえ仄亞。」

「なあに？」

「猫みたいに鳴いてみて？」

「分かった。止めるは言わないそのかわり部屋用意してください。
どこでもいいから。いつそどっかの倉庫とかでも……埃っぽく
なれば。うん、埃っぽくなければどこでもいいんで！」

「だってさジジイ。」

「いやあ、これはこれで見えて楽しいからのう。」

ええい、第一ボタン外しちゃえ。邪魔だ。

「ほんと、誰か助けて。もう帰らせて。」

「いや、それはだめじゃ。」

「……仄亞。」

「ん？」

「ちよつとごめんね？」

私は気を失った。

いい子という名の何でも聞く子（後書き）

反則っていうのは上目づかいのことです。ちなみにこれが家で、二人きりならとくに曉留の理性の弦が切れています。

正常という名の異常（前書き）

グロくはありませんがブラック暁留君が降臨中です。ご注意ください。

正常という名の異常

「はあ。」

疲れた。ものすごく疲れた。汗がまだ止まらない。

「また、強硬手段に出たな。知らないよ？」

「まあ次起きた時には正常だと思うから。」

まあ正常がさっきのなんだけどね。ついでに純粹無垢この上ない少女をそんなふうにしちゃったのは僕なんだけどね。それ言うと多分雪兄あたりに怒られるから言わないけど。

「潤んだ目で上目づかいつてどう考えても反則だよな。」

まったく、誰があの子をあんな風に……僕だな。

「まあ、男から襲われてもおかしかないわな。いやあ、恐ろしい子が世の中にはいるもんだ。」

「ま、仕込んだのが悪いね。」

ばれてた。

「いやあ、ね？大丈夫、男に襲われるようなことはないから。」

前の学校ではあったみたいだけど。ま、それは後で聞き出して締めときゃいつか。

「とりあえず指の切り落としだよな。」

僕の許可なく仄亞に触れるだなんて、大罪も大罪。ちゃんと悪いことをしたイケナイ指を落としておかなくっちゃ。

「……おい、暁留ー帰ってこーい。」

「それと……もう二度と喋れないように舌抜くか。」

仄亞が聞いていいのは僕の声だけ。他はちゃんと許可を取らないとね。

「……おい、友人やめていいか！。」

「後は……まあ社会的に殺して、精神的に殺して、どっかの病院にぶち込もう。」

そうだな。そうしよう。仄亞と同じ社会にいていいのは僕だけ。仄

亞を想っていいのも、仄亞に想われていいのも僕だけ。ああ、そう
だ。

「足切つとかないと。」

仄亞のもとに訪れられたら困るしな。ああ、『正常時』の仄亞を見
せてショックを受けさせるって言うのもいいな。一応案に入れてお
こう。

「……暁留ー友人やめるぞーやめるぞー。」

僕はとりあえず大罪人の壊し方を666通り考えて、満足し、さっ
きからうるさい桐生の相手をする。

「桐生、友達やめないでね。」

「……ああ。」

なんやかんやでいい奴だこいつ。さすが仄亞の兄。まあ、その妹が
昔とおおいに変わっているのは無視してもらおう。

「ふう。さてと、全員揃ってるし、とりあえず話聞いて、んで家帰
ろうよ。仄亞。」

「うん……?」

呼んただけで起きるあたり、僕の躰は上手くいっているってことだ
ね。よかったよかった。

「うー……うー……うー!」

あ、理性戻った。スイッチ切れた。あーあ、赤面してるよ。可愛い
なー。さてと、今度は僕の番だよね?覚悟しててよ仄亞。さっきの
お返し、たあっぷりしてあげるからさ……

正常という名の異常（後書き）

溺愛って怖いなあと思う今日この頃。

天使という名の悪魔（前書き）

一人称仄亞に戻ります。短め。

天使という名の悪魔

「さてと。」

ヤバイ、ヤバイよ。どうしよう。なんでスイッチ入っちゃったの私。暁留が笑ってるよ。怖いよ。むしろ怖いよ。叫び出したいよ。お兄ちゃんのほう見れないよ。

「うう……」

さあ、最終宣告の時だ。ああ、さようなら。

「話って何？学園長？」

え？

「あ、ああ、ええとじゃな。」

ちよ、ちよっと待ってよ。なんで？

「えーっと……そう、裏の当主の話なんじゃが……話していいのか？」

そうだよ、あんなに煽ったんだよ？絶対押し倒すくらいのことはやるだろうと思ってたのに。

「え？早く話してよ。」

ええ？これ、本当に暁留？実は別人じゃないの？そう思っていたら、笑われた、につこりと、天使のように……私は自分の顔が真っ青になっていくのを感じた。そうか、そういうことか。

あとでじっくりいたぶるつもりなんだ……

「うう……減刑を求めます。」

「減刑？何言ってるの？」

僕はそんなことしないよって笑顔で言ってるけれど……私には分かる。僕が減刑なんてすると思ってるの？って言ってるんだ。

「オリンポス十二神と八百万の神と後は……アトン神とかに祈っておけばどうにかなるかな……」

知ってる限りの神様を脳に思い浮かべ祈る。できる限り優しい罰ですみますように。ああ、でもなんでだろう。神様がみんな困り顔だよ、諦めなさいって言う目で微笑んでるよ。なんで？

「で？話は？」

「ああ、裏当主がずっと空いていることは皆知っておるな？」

「あーそうだねえ。今は先代の補佐が代理でやってるんだろ？」

「そう、で、そろそろ後任を決めようと思う。」

へえ、そうなんですか。裏当主決めるんですか。ははは。そんなことより誰か私を救って下さい。

「でまあ、本家の方々と話しあった。」

「で？誰がやんの。」

「暁留。」

時が数秒止まった気がした。私からしたらへえ、そうなんですか。それより罰はどうなってるんですかって感じだけど。あ、後雪さんも平然としてる。叶多さんと碧露さん、雪白も。後よく分かってない人々（葉月さんが連れてきた人と実希、お兄ちゃん）も平然としてる。

天使という名の悪魔（後書き）

現在の仄亞の脳内は減刑の二文字しかありません。だから平然としています。

で、白雪や叶多は予想が付いていたので平然、碧露・雪白は知っていた組。他の方々は意味が分かっていないので平然としております。

小話 バレンタインという名のわずかな進展？（前書き）

進展するのは仄亞や雪白ではありません。彼らは行きつくところまでいきついちゃってるので。今回は片思い中の「彼女」のお話です。

小話 バレンタインという名のわずかな進展？

「ねえ、雪白、仄亞。」

「何？」

「何ですか？」

真剣な眼をした実希。何かあったのかな？

「二人とも、バレンタインってどうするの？」

バレンタイン……それは女の戦い。ああ、そろそろだね。

「んー……まあチョコレートあげるよ？」

多分この中で一番R指定かかりそうな方法で。

「私もそうですねー……あげますよ？」

「手作りを？」

「そうじゃなかったら殺されるからねー。」

私の場合は。笑顔で壁際まで追い詰められて……うん、考えるのやめよう。

「そっかー……私、毎年既成品だったのよね……」

「まあ重くはないですね。」

「いいなあ、それが許されるのが。」

私なんて。私なんて……あ、視界がにじみ出した。

「いや、許されるも何もまず私たち付き合っていないわよ……で、どうしようかなと思ってね？」

「あー……んじゃあ一緒に作る？」

どうせ私も作らなきゃいけないわけだし。

「いいのー？」

「うん。雪白も一緒に作る？」

「はい。」

ということ……

「んーこんな感じかな？」

みんなでチョコクッキーを作ってみました。うん、美味しそうにできてる。

「ふう、結構綺麗にできましたね。」

「そうだね。」

本当はタバスコかなんか入れてやろうかと思っただけどそれやったところで美味しいって全部食べるだろうしね。それでお腹痛めて看病させられるくらいなら最初から美味しいものを食べさせるほうがいいし。

「で、どのタイミングで渡そうかしら……」

「え？ そんなの適当に。」

いちいち考えてもどうしようもないし。

「うーうー……」

そうこうしているとドアが開く音がした。

「あ、お兄ちゃんだ。おかえりー。」

「おー……いい匂いしてんなー。」

「私はお兄ちゃんの分は作ってないよ？ 晁留の分しかないから既

成品で我慢してね。」

「はいはい。」

まったく、独占欲の強い彼氏を持つと大変だ。

「え、えーっと桐生君？」

「ん？」

「これ、よかつたら……いや、いらないうらいいのよ！ 私が食べるし……」

「いらないうらなんてそんな……もったいない。いただくよ。」

そのままチョコクッキーは実希の手からお兄ちゃんの口の中へ……

お兄ちゃん、無意識なんだろうけど実希の顔が真っ赤だよ。

「ん、美味しい。」

「あ、う、あり、がとう。」

「まだある？」

「え、あ、はい。」

その後数分間、チョコクッキーは実希の手からお兄ちゃんの口へと旅を続けましたとき。

「んー……ご馳走さま。」

「ど、どういたしまして。」

「結構甘かったよなー……まあ俺は平気だけど。」

「???? これ、苦めに作ったんだけど？」

「あれ？ おつかしいなー……」

二人して疑問符を頭に浮かべる。いや、多分それ……

「実希さんの手から頂いたからそうなってるんじゃない」

「教えちゃだめだよ。面白くなる。」

さて、鈍い二人がくつつくのはいつのことになるのやら……

小話 バレンタインという名のわずかな進展？（後書き）

本当、いつになるんでしょうね。

ちなみに彼らは本気で分かってません。そして桐生の行為は何も意識されていません。（実希はあたふたしてましたが。）

桐生君はどうやら天然だったようです。ある意味計算してやってる
暁留や白雪よりも性質悪いタイプ。

本家の人々という名のプライドの高い人々（前書き）

短め？

本家の人々という名のプライドの高い人々

「ちょっと待てよ、爺さん。なんで白雪じゃねーんだよ。おかしいだろ。暁留はまだ高校生だぜ？」

「いやあ、わしもそう思っとったんじやがの、白雪じゃ本家の人が領かんのじゃ。」

「何ですか？」

「こつ、白雪をトップに持ってきてたまるかというか、あんな奴にやられるなんて嫌というか……」

「要するにプライドの問題だろ？」

心が狭いなあ、本家の人たち。ああ、減刑、減刑、お願いします。

「いや、でもよ。」

「本家の決定に背けるのか？」

「それは……」

「大体補佐に白雪つけるから問題ないよ。」

「……意味不明だ。」

「だから、こいつにやられたくねーんだよ。やられるなら暁留のほうがましってこつた。たとえ表面上のことでもな。」

「……仄亞ちゃんだって反対だよな？」

「減刑。減刑してくれるならもう誰が当主だろうがいいです。」

「……話にならねえ。」

まあ、それは置いておいたとしてもだ。

「真面目な話、暁留が当主でも問題ないと思いますよ。客観的に見ても確かに能力はありますし、高校は義務教育じゃない。大体雨欺なんだから学校だって社会的にプラスになるから行ってるだけで、本当は行く必要がないんです。むしろ雪さんを当主に持ってきたら大変ですよ。すぐに雨欺内での権力が根から変わってしまう。急激な変化はまずい。まあ雪さんならへまはしないでしょうけど。面倒なことになるのは確実です。なら暁留のほうがいいでしょうね。人

形じゃあるまいし、少しは抑制できる。」

「……冠薙は、どう思う。」

「まあ確かに晧留さんがやるのは早すぎる気もするけど……でも仄
亞ちゃんの話聞いてたら確かにいいかなとは思う。」

笙月さんが舌打ち。ああ、それはどうでもいいから減刑！げ・ん・
け・い！

「ま、いーんじゃねーの。諦めろって。」

「……」

「まあこれ、今の裏の当主が了承しないとただ無駄になるだけなん
じやがの。」

「ならまだ可能性はありますね。」

葉月さんも反対なんだ。ふーん。

「この番号に連絡すればいいらしいんじやが……ぴっぴっぴと。」

『プルルルル』

「叶多さん、電話。」

「おー。」

え？

「もしもし？」

「もしもし……って今の裏の当主は……」

「つと、とりあえず切りますわ。」

叶多さんが、裏の当主？

本家の人々という名のプライドの高い人々（後書き）

そろそろ減刑はあきらめるべきだと思う作者です。

という心が狭いって仄亞も大概狭いと思うんですよねー……え？
その彼氏？……狭いに決まってるじゃないですか。この二人はおそ
らくどっこいどっこいですね。

世代交代という名の軽い約束（前書き）

短めです。すみません……ストックが、ストックが……！

世代交代という名の軽い約束

「いやあ、どーも。裏当主代理、先代補佐の雨欺叶多デス。」

「……」

「やーま、怒らないでほしーですねー。大体裏当主って基本公にしちやダメなんでー。今回は例外中の例外だし、てか白雪は俺がそうだって知ってたしー。」

へーそうなのか。ふーん。

「ですね、裏当主のことなんですが。ま、暁留でいいつしよ。あ、理由はそこの女の子と一緒に。反論は認めません。ってなわけでまあ頑張れ。」

「……え？」

ポンつと暁留の肩を叩く叶多さん。え？

「軽くないですか？」

「えーこんなもんだって。俺らの時とかもっと軽かったし。あ、これが当主印な。」

軽っ！本当に軽いなあい！

「はあ。」

「ていうか本当にいいんですか!？」

「えー問題ねーって。反論は認めないつつつたろ。」

「はあ……」

「ま、次世代が平穩無事に育つように努力するこつたな。」

「それは約束しかねます。」

いや、約束しろよ。

「ほう。じゃあお前は何のために当主になる？」

「そんなの決まってるでしょう。」

なんだろう。すごく嫌な予感がする。

「可愛い片翼のため。それ以外に理由なんていない。」

「うん、期待通りの答えをありがとう。出きれば欲しくなかったか

な。」

「それはどういう意味かな？」

いや、そのままの意味です。

「とりあえず躑躑直しが必要なことだけ分かったよ。」

「とりあえず笑顔の大安売りをやめてよ。」

壊れそうになるから。

「ああ、他の人には見せたくない。仄亜も結構独占欲が強いよね。」

「

「激しく違う。まあ後半は……責任とってもらってから。」

「はいはい。いくらでもとりますよ。お姫さま。」

世代交代という名の軽い約束（後書き）

ストック切れそうです……そして次回更新が予定通りいくかが……
はああああ……遅れても温かい目で見守ってあげてください。ええ、
もうあーこいつ何やってんだよ馬鹿じゃねえのははまあ寛大な俺
様は許してやるけどな。くらいの気持ちでお願いしますね……

悪魔の数字という名の甘美な数字（前書き）

遅れてすみません……次回はちゃんと更新できる……はず！
ブラック暁留君とそれを簡単に受け入れちゃう仄亜ちゃんが降臨中
です。

悪魔の数字という名の甘美な数字

「どうだか。男の人なんてすぐ飽きちゃうし。」

「うーん……結構飽きるのは大変なんだよね。なんせほら、仄亞を666通りの方法で壊して、狂わせてあげた後にもう一回リセット、んでもってまた他の666通りで……うん、なかなか飽きるのは難しそうだね。」

うん、斜め147・8度くらいの答えをどうもありがとう。

「これは私は喜ぶべきなのかな？」

「ん？もちろんだよ。」

だから笑顔の無料配布は困るんだってば。

「僕に壊されたいでしょ？狂わされたいでしょ？」

「……」

ああ、否定しきれない自分が悲しい！！

「僕はね、仄亞を壊したいし狂わせたいよ。別に人形のようになくても構わない。僕だけのモノでいてくれるならね。」

「……あー……ちょっと……これは……末期かも。」

何がってこの狂った言葉に喜びを感じてる自分の脳が。これだけ想われて嬉しいと思ってしまう私の心が……もう狂っている。

「暁留。」

「ん？」

まあ、毎日毎日待っててくれたわけだし。ご褒美。

「壊してね。」

「……」

「狂わせて、壊して……ちゃんと留めといて。別にその結果私がどうなってもいいから。ていうかもうすでにかなりヤバい領域に足突っ込んでるし。うん。」

本当ね、こんなこと言っちゃってる時点でまずいよね。

「ちゃんと私を暁留のモノにしてよ？私も暁留を私のモノにするか

ら。」

あーなんか恥ずかしくなってきた……また顔が熱くなってきた。

「……あー……もうさー……ほんと……はー……」

なんか呆れてます？

「いやー……ほんと。なんでこんな……」

あ、あれ？喜んでくれるかなーと思っただけ……なんでそんな呆れた感じなの？

「ほんつつつつつと、仄亞はなんでこんなに可愛いんだろっね。」

「苦しいんだけど。」

抱きつくのはいいんだけど手加減とかいうものを覚えてほしいよ。

「誰にも見せたくないくらい可愛い。」

「ありがとう。」

たぶんそれ、恋は盲目フィルターがかつてるからだと思うけど。

「僕以外で仄亞に触れた人間はとりあえず私刑にしたいくらい好き。」

あ、あれ？

「ねえ、仄亞。」

「はい？」

あの、とりあえず腰のほうに回ってきた手はどうするべきかを教えていただきたいんですが？

「一体、どこの、誰が、僕の許可なく仄亞に触れたのかな？」

えーつとえーつと。

「ゆ、雪さん？」

「そっついのはいいから。」

う、嘘は言っていない！けど暁留の笑顔がすごく怖い！

悪魔の数字という名の甘美な数字（後書き）

ほんつつつつつと、君らはなんでこんなに病んでるんだろうね。
作者もついていけない領域ですよ。みなさん、大丈夫ですか？なん
か気分悪くなったりしてませんか？作者は責任取れませんが、そ
の場合他作品で心を癒すことをお勧めします……いや、私の他作品
は読んでもむしろ症状を悪化させるだけです……あ、涙出てきた。

小話 嫌いな日という名のホワイトデー（前書き）

地震、津波で東日本一帯、大変なことになっておりますが皆様ご無事でしうか？私は大阪在住、親戚もみなこっちなので大丈夫なのですが……

どうやらこの事態に便乗し女性を狙った犯罪なども起こっているようです。皆様、お気を付けくださいませ！

皆様と皆様のご家族、友人のご無事をお祈りしております。

小話 嫌いな日という名のホワイトデー

「おはよー仄さん……どした？元氣ないね。」

「ああ、おはよ。」

私は黒板を見てまた溜息をつく。はああ……日付、変わればいいのに。

「ああ、そついや今日ホワイトデーですなー……仄さんももらえるんでしょー？」

「ああ、うん。うん……」

そつ、今日はホワイトデー……ああ、憂鬱。

「羨ましーなー……でもなんで元氣ないの？もらえなさそうな感じとか？ああ、喧嘩？」

「いやあ……むしろその逆、かな。」

そう、むしろそつちのほうがよかったかもしれない。

「んー？ああ、お返しが高価すぎるとか？」

「それはない。」

基本的にそんな高価なものくれるのは誕生日くらいだし、本人も私がお返しに困るの分かってるからあんまりそんなことはしない。

「じゃあ何が問題なの？」

「お返しの仕方？」

「は？」

「仄亞も大変よねー……私も今回のお返しは怖いけど。」

「分かってくれてありがとう、実希。」

やっぱり持つべきものは友人だね。

「いいのよ……また心臓爆破したらどうしよう。」

「私の場合そついう問題じゃない……」

実希のはまだいいじゃんよ。相手お兄ちゃんだし。ただの天然だし。こつちは策士相手だよ？

「明日、私生きてるかなあ……」

主に精神的に。

「そんなにすごいのか？アキ先輩。」

「すごいっていうかなんていうか……まあ暁留の作るものは美味し
いからいいんだけどね？いいんだけどさ……」

こう、渡し方が……なんといいますが、身体的にかよわい私には辛
いといえますか。

「まだ予測できるだけましじゃない？」

「予測できるからお家に帰れない……」

帰ったら笑顔だよ、奴絶対笑顔だよ。

「なんでホワイトデーなんてあるんだろう。向こうに主導権渡した
ら終わるよ。私の人生の終わりが来るよ。新たな世界への扉が開か
れるよ。」

「……ラブラブですのう。」

「私は全力で拒否してるんだけど。」

「とかいいつつ仄亞はスイッチ入ったら大変よね。」

「今日は無理やり入れられる。多分。」

絶対入れられる。そしてその後……はああああ。

「よく咲良さんも何も言わないわよね。」

「楽しんでるもん。」

「雪せんせーんとこ行けばいいんじゃない？」

「あー……それやると後が怖いんだよ……」

無表情の暁留は恐怖ですよ。

「じゃあ、潔く諦める？」

「ですよー。」

家、帰りたくないなあ……

次の日。

「仄さん大丈夫？」

「全然大丈夫じゃない。」

寝不足で頭痛がする私がいるのだった。

ホワイトデー、嫌い。

？

小話 嫌いな日という名のホワイトデー（後書き）

今日、ホワイトデーですよ。色々あってなかなか気づきませんでしたが。西のほうでは皆さんクッキーだの何だの渡しておりますが。

というわけでホワイトデーのお話。

仄亜が何されたかはご想像にお任せしますが、多分彼女はホワイトデー大嫌いって言うだけで本当は好きだと思いますよ。結構。

前の学校の話という名の嫉妬心を煽る話（前書き）

短めです……すみません……

前の学校の話という名の嫉妬心を煽る話

「あー……前の学校の話だね？」

「それ以外にあるならそつちも教えてくれる？」

「いえ、ないです……で、前の学校の話、しなきゃだめ？」
できればしたくないんだけど。

「思い出したくないようなこと、されたんだ？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ……」

「じゃあ人前で話せないようなことをされたの？」

「そういうわけでもないかな……」

もうスイッチ入ったの見られてるし。あれ以上恥ずかしいことかないし。

「じゃあ、相手のこと庇ってる？」

あ、若干気温下がった気がする。おかしいな、風邪でもひいたかな。

「……仄（は）亞（あ）？」

「うーんつとですね……その、なんといいですか。」

確かに庇ってる。多分スイッチを入れてしまえばすぐに相手の名前としたことを言うのだろう。けれど今の私はスイッチが入っていない。だから言えない。

「……言わないのならスイッチ入れていい？」

「それはいや！」

「じゃあ言つて。」

「それもいや……」

「あれもいやこれもいや……いつからそんなに我儘な子に育ったのかな。」

「だって……」

だって誰か言ったらその人を暁留は壊してしまう。それは避けたい。

「もつといいよ。」

「え？」

「そんなに言いたくないなら仄亞についてた護衛に聞けばいいだけの話だし。」

「それは……」

「僕、機嫌悪いから拷問しちゃうかもなー。で、すっかり間違えて殺しちゃったりなんかして……それはないとしてもうっかり間違えて壊しちゃうかも。」

「試すような瞳……ごめん。友人。」

「言うからそれはやめて?」

「仄亞が賢くて助かるよ。」

「さてここで問題です。なぜ私は言うことにしたでしょうか。」

「答え。私以外を暁留が傷つけるのがいやだったから。ついでに試すような暁留がすごくかっこよかったから。別に賢かったからではない。」

前の学校の話という名の嫉妬心を煽る話（後書き）

本当になんでこんなに病んでるんでしょうね。最初の予定では仄間はまともだったのに……

柊の子どもという名の被害者（予定）（前書き）

やっぱり短いですねー……しかもまたちょっと病んでるし。すみません……

柊の子どもという名の被害者（予定）

「で？」

「んーとねー……とりあえず何されたから話すね。まあ二回あったんだけど、一回目は憎しみの感情から、二回目はまあ不慮の事故と愛情からなんだよね。」

「へえ……二回。同じ人から？」

「うん。向こうの名前さー、柊まつりって言うんだよね。」

「……柊本家の息子？」

「うん。」

「いい名前だね。まるで血祭りにあげてくれってねだられてる気分だよ。」

「暁留の眼がものすごく怖い。なんか虚空を見て笑ってるよ。ごめん、まつり。」

「で、深桜のこと嫌っててさ、それでまあとばかりをくらったんだよ。それが一回目。押し倒されて服脱がされそうになったただけけど。」

「……ああ、まつり君は僕に拷問してほしいんだね。なるほどね。」

「ごめん、まつり。本当にごめん。なにがごめんって暁留のこの表情が私たまらなく好きなんだよね。だからもつと……嫌ってもらうね？」

「それでね？一回目は暁留以外に身体見られて怒られちゃうのが怖くてその、暴走しちゃって。それで無事だったの。」

「仄亞、僕の眼にはいたぶられることを望んでるまつり君が見えるんだけど気のせいかな？」

この捕食者の目がたまらなく好きだ。ぞくぞくする。

「で、二回目は海に行った時なんだけど。」

「うん。」

「まあ、半ば無理やり海に連れていかれて。でまあ暁留との約束もあるし、上にパーカー下には結構長めのパレオと露出少なくしてた

わけ。」

「えらいね。」

「で、まあ海に入らず砂浜でばーっとしてたわけよ。そしたらどうもそれに不満だった友人がいたみたいで。」

「なんか展開読めてきたんだけど。」

多分晝留の想像通りだと思うよ。

「仄亞も海に入りなよってなって。断ったんだよね。そしたら、その子まつりが私に好意を持ってるの知ってたのか、まつりちよっと脱がしちゃいなよって。」

「その子、僕に消されたいのかな。」

「さあ？でまあまつりは嫌だって言っただけどほら、その場のノリっていう厄介なものがあるから……」

「まつり君、実行しちゃったんだね。」

「そ。でもこつちも黙って脱がされるわけにもいかないし。抵抗したんだよね。でもまあ所詮向こうは男でこつちは女。捕獲されて。それでも抵抗してたらこう、ズルツと後ろに滑ってこけちゃって……しかもそれにまつりを巻きこんじゃってこう、押し倒されてしまったみたいな状況になってしまったと。」

「お約束過ぎてびっくりだよ。」

私だってびっくりしたよ。

「それで終わればいいものの調子に乗ったギャラリーがそのまま脱がしちゃえよ　みたいな言い始めてさ。でまあ、脱がされちゃったと。」

「ふうん。」

柊の子どもという名の被害者（予定）（後書き）

まつり、逃げる。

てな訳で柊まつり。実は漢字は茉莉だったり。性別は男であつてます。仄亞の向こうでの友人で、彼は仄亞に片思いしてました。絶対に叶わないのに。ちなみに柊本家の二男です。上に兄一人と下に妹が一人います。もちろん後継ぎは妹。

柊家は桜門六花で一番下の位置にいるお家です。深桜と昔色々あったので仲はよくないです。と言っても柊がただ敵対心を抱いているだけです。

小話 エイプリルフルという名の本心を伝える日（前書き）

本編より一年ほど過去です。まつりが不憫な日とも言つ日です。クラスメートはまつりが仄亞を好きって知ってます。まつりも仄亞も分かってます。あと、みんなアキトさんっていうのが仄亞の恋人であることも知ってます。

仄亞が荒れてます。実は荒れてます。暁留の情緒不安定は分かりやすいけどこの子分かりづらいなあ。

小話 エイプリルフルという名の本心を伝える日

今日はエイプリルフル。嘘をついてもいい日。

「やつほーまつり。」

「……おはよ。つたく、なんだってこんな面倒なことしなきゃならないんだよ。」

「サボればいいんじゃない?」

「俺に死ねと?」

「ま、確かに行かなかつたら殺されそうだけどね。」

今日はエイプリルフル。すなわち春休み中。なのになぜ、私とまつりが会っているかというと、クラスメートの一人により、エイプリルフルパーティーしようぜ! ってなったから。

「本当意味分かんねー。なんで朝八時招集なんだよ。」

「午前中じゃなきゃ意味がないからじゃない?」

「はあ……」

溜息をつくまつりは無視して、晝留のことを考える。変な嘘ついたら面倒なことになるしなあ。どうしようかな。

「つと、ついたな。」

「え? ああ。そうだね。うわ、もう結構集まってるや。」

まあ一番遅いつてことはないみたいだけど。

「やつほー二人とも。」

「うん、おはよう。」

「おーっす。」

「今日はじゃんじゃん嘘ついていいからね!」

「はいはい。」

「めんどくせー。」

そして、数分後、皆が集まった。

「さてさて、皆さま。本日はエイプリルフル。一年に一度の嘘をついてもいい日。ってなわけでじゃんじゃん嘘つきまкруうぜ！あ、でも後々に響きそうな嘘はなしで。それだけ守ってねー！」
「なんであんなにテンション高いのかなあ。あの子は。」

「あーダルっ。」

「何で来たの……ま、いいや。ねえまつり。」

「あ？」

「好きだよ。」

「……」

につこり笑っている私と、ピシリと凍っているまつり。ついでにやにやしながら見ているクラスメートたち。

「お、前。」

「ん？」

「お前が好きなのは……」

そんな時、私の携帯が鳴った。相手は……お兄ちゃん？

「あ、ごめん。ちょっと待ってね。」

「え、ああ。」

「もしもし？」

「もしもし？ 仄亞？」

「じゃなかったらすごいよ。」

「まあエイプリルフルだからそういうこともあるかなと。今大丈夫か？」

「うん。大丈夫。ただできれば手短に話してほしいかも。」

「あー……あのさ。晝留に電話かけるなりメールするなりしてやってくれね？ 見てて可哀想。」

「いったいどんな生活してるの……」

「エイプリルフルだし。毎年お前電話してやってるんだからさ。今年もよろしくなっていう念押し。じゃあな。」

「あーうん。じゃあね。」
プツッ。

「うーん……電話、ね。」

ま、ここでかけるも一興かな。

「今の誰？」

「ああ、お兄ちゃん。ちょっとした念押しだった。」

「はあ？」

さてと、電話電話。

「もしもし？」

『仄亞？』

「うん。おはよう。起きてた？」

『まあ、一応。』

「ならよかった。あのね。晧留。」

『うん？』

「大っ嫌い。」

電話の向こうから押し殺したような笑い声が聞こえた。

『僕も君のこと大っ嫌いだよ。仄亞。』

「それだけのの。じゃあね。」

『うん。じゃあね。』

ブツッ。

「……アキトさん？」

「うん。」

「……そっか。」

まつりは苦笑いをして別の友人のところへと歩いて行った。

「ホノちゃんさー。」

「んー？」

「ありやないよ。」

「なんのこと？」

分かっているけど聞いておく。

「まつりに好きって言った時より、アキトさんに大っ嫌いって言った時のほうが……なんていうか、笑顔だったって言うか、幸せそうだったっていうか……とにかくまつりが可哀想。」

「そうだった？」

「無自覚って余計にタチ悪いよ。」
知らない知らない。

それに、一番可哀想なのは、

ずっとずっと私を待って、待って待って待って、電話一つで喜んで、
やう、

暁留だと思っよ。

？

小話 エイプリルフルという名の本心を伝える日（後書き）

これで荒れてるっていうね。本当分かりづらい子だなあ。まあ仄亞は基本的にこんな子です。晝留いないから普段よりひどい感じです。彼女にとってまつりなんてどうでもいいんです。ついでにクラスメートもどうでもいいんです。もちろん無自覚でもなんでもありません。自覚しててやっています。

本編だと仄亞が苦勞してるように見えるけど、過去見ると晝留といい勝負だと思います。結局似てるんだよ君ら。

愛しあうという名の病んでる行為（前書き）

残酷描写あり。ただし軽度。というか本日二回目の首絞め。短いよ
うな。またまた病んでます。本当すみません……反省してます……

愛しあうという名の病んでる行為

「でまあ、これには続きがあつて。ほら、アレ、見られちゃってさ。」

「いいじゃん。別に。」

「面白いよね。みんな慌てふためいてたよ。べつにアレを隠したかったわけじゃないんだけど。まつりとか謝り倒してたし。そんなに後悔するならやるなつて話だよね。馬鹿じゃないの彼ら。」

「で、まつり君、どんな反応だった？」

「うん？ 面白いくらい凍ってた。その後お前これでいいのかって聞かれたから、笑顔でこれの何が悪いの？ って返した。」

「もう仄亞つてば可愛いよね。」

それはそれは、太陽が凍りつくような笑顔で言つてやったわ。ざまあみろつての。私は脱がされてきやあとか言つてお嬢様じゃないし。むしろ脱がされたら倍にしてひどい目に合わせるのが私だし。

「でもさー……まつり、友人なわけよ。」

「そう。」

「だから、できればあんまりひどいことはしないでほしいんだよね。まあできればだけど。」

どうしてもまつりを消したいつて言うなら構わないけど。

「うーん……まあ、会う機会もないしなあ。」

「いや、それはあるよ。こっちに遊びに来るつて言つてたし。確か春休みだったかな。」

「……ちよつとだけ、話しあつて、それでまあいいかな。」

「いいの？」

そんな簡単なことで。

「仄亞の友達なんでしょ？それにまあアレ見たんならもう十分な気もするし。今僕機嫌いいし。」

……機嫌悪かつたらまつり壊してただろ、お前。まあとりあえず。

「ありがとう。暁留。」

「どういたしまして。まあ仄亞のお仕置きはするけどね？」

「……え？」

「え？　じゃないでしょ。やるよ。僕に内緒で海行ってましたっただけでもうアウトでしょ。しかもそれに加えて押し倒されたことも連絡してきてないし。」

「………」

ちよつと、待って。

「大丈夫。ちよつと苦しいだけだから。ね？」

「……っ！？」

首が締められてる。本日二回目か……はあ。

「んー……やっぱり苦しんでる仄亞の顔、可愛い。」

そりゃよかったね。

「大丈夫だよ。殺しはしないから……ね？」

殺されたら……ああ、でも最期に見るのが暁留なら、暁留によって消されるなら、いいかもしれない。とか思ってる私はやっぱり変かまあいいや。別にどうでもいいし。暁留はそれでいいって言ってるし……あ、意識朦朧としてきた。視界も……

「ちわーっす、寿司届けに来ました……！？」

「ああ、どうも。ええと、いくらじゃったか……」

「え、あ。」

そっか、お昼か。そんな顔されても困るよ配達人さん。ねえ、私たちただ愛し合ってるだけなのに。

「……本当、可愛いよね。」

手が、首から離れた。

愛しあうという名の病んでる行為（後書き）

暁留が首絞めるのが好き（？）なのは手加減しやすいからっていう理由です。要するに仄亞が雨欺になれば首絞め以外の愛情表現を始めるということです。バリエーションが増えます。よかったですね！（え？）

やってきたことという名の誤魔化さなければならぬこと（前書き）

ストックが本当に切れたああああ！！！！ 白雪さんが妙にツンデレな回です。

やってきたことという名の誤魔化さなければならぬこと

「げほっ……ごほっ……」

「大丈夫？」

「うん。」

「無茶なくていいんだよ？」

「させてるの曉留だよ。」

「知らない知らない。」

いや、そう言われてもね。

「えー……あー……ありがとうございました。」

「はいはい……あのね、二人とも何やってるの。」

「いや、まさかのお寿司屋さんだよな。」

「あのねえ。」

「まあ仕方ない。早く食べようよ。お腹すいた。」

「そうじゃな。」

「え、あの、学園長。俺らは……」

「何の問題があるんじゃ？一緒に食べたらよいじゃろう？」

おじい様……心が広いわ。ところでこれ、確実に特上寿司なんだけど。いいのかな……

「はあ……なら、遠慮なく。」

みんな席について、いただきます。

「うわー……うっめえ。さすが本家の人間。俺、ここ数日適当なものしか食ってなかったからなー……胃、大丈夫かな。」

「その場合看病しないからね。」

「とか言いつつしてくれる白雪は俺のよ……」

なんで途中で叶多さんが黙ったって白雪さんに殴られたから。

「……俺の息子。」

「殺すよ？」

「お前になら殺されてもいいよ。」

「暁留に殺させるから。」

「……へーへーおとなしくしてますよ。ツンデレめ。」

「誰が。てか一体どんな生活送ってたわけ？」

「適当に放浪してた。家は車。」

「うわ、雨欺なのに。曲がりなりにも雨欺なのに。」

「ふーん。」

「ま、それなりには快適だったぜ？」

「あつそ。心配して損した。」

「心配はしてたんだ……」

「心配してくれてたのか。」

「まあそれなりには。どっかで行き倒れてそうだしね。」

「俺にはもつたいない息子だな。」

「だから、僕叶多さんの息子じゃないっての。」

「とまあ楽しく食事は進んでいくわけですが。」

「ねえ仄亞？」

「何？」

「一体あなた、雨欺先輩と何やってきたの？」

「あはは……」

「何ってそりやあもう色々と……色々と。」

「おい、暁留。」

「んー？」

「一体お前、仄亞と何やってきたんだ？」

「何ってそりやまあ色々楽しいことを。」

「例えば？」

「えー？しば「うーわーーーーー」……とか？」

「あ、危なかった。危なかった。」

「お、お兄ちゃん。」

「ん？」

「イカ美味しいね。」

「え、ああ。うん。美味しいな。で、なんて？」

「だか「このイカどこのなんだろうね？」」

「うーん……どこのだろうな？で、なんて？」

「どうも仄^へ亞^あが言^いってほしくなさそうだから言^いわないでおくよ。」

よし、曉^{あき}留^{りゅう}。偉^いい。空^{そら}気^き読^よめてる。

やってきたことという名の誤魔化さなければならぬこと（後書き）

同じ雨欺でもピンからキリまであるよってことですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843m/>

それは暁色の.....

2011年4月17日19時47分発行